

「あなた、明日の国連事務総長との会議にあなたも出席してね」

「うん、おまえの望むことは何でもするよ。第一、おれはおまえだからな」

「私たち、元に戻れるかしら？私には子供がいるし、あなたにもいるでしょう。お互いに社会的な制約ができてしまったから」

「この社会の規範が変化する時が、直ぐ目の前まで迫ってきているよ。高いものが低くなり、低かったものが高くなる。家族の絆は、全体の絆になり、個というものは亡くなって、全てが自分自身になる。男と女の関係もタブー視されてきたこれまでの規範を超えたものになる。男女の役割も渾然としてくる。結婚しようがしまいが、ひとりの相手だけを愛し続けて生きようが、沢山の相手を愛して生きようが、社会の規範に捕らわれず、すべて自分の意識に委ねられる時代がくる。今までは、愛の衝動は動物的な情念に支配されてきていたが、これからの社会では、慈悲的な愛に従うようになる。子供の無い人も、子供を沢山育てている人もそれは社会的な世襲と謂う認識を超えて、家族や社会と謂う全体的な愛の中に育み、生きるようになってゆく。由宇、おまえはその土台となる地上の準備、俺はその理念となるパラダイムの構築を担っていると思う。そして亜紀が虚次元の解放を図る・・・ああ、おれはやっぱり、祐子、おまえをこの上なく愛している」

祐子は賢の身体を自分に引き寄せた。ふたりは再び強く抱擁し合った。2時間ほどが経過してふたりは離れ、起き上がってベッドの縁に腰掛けた。祐子は賢に凭れ掛かりながら、ウグングと約束したアフリカ救済作戦について説明した。賢は祐子の髪を撫でながら話を聞いていたが、耳で聞くというより、ただ祐子の意識を感じているのだった。賢が言った。

「由宇、おまえの好きなようにすると良いよ。俺はおまえが自分の考えを実行するのを手助けするだけだ。それも、その場でどうにでもできる」

「その場で？そんなことできるの？」

「できると思うとできる。おまえがやっている治療もそうだろう。だから、その場で何でもできる。それより俺たちが今行っている事は、次の時代では普通に行われることだということを常に意識していることが大

切だ。俺たちの間には、こうしてコンゴと日本の距離も無くなったし、霊界と現象界の障壁も越えられるし、本来の生き方に戻って来ているって感じがする。本当はOVSも物質転送機も必要ないんだ。意識を極限まで透明にし、集中させることができさえすれば、俺やおまえ、そして巫紀のやっていることは、全ての人間にできる筈だ。この地球という、あらゆる存在を縛り付けておいて育む環境も、そろそろ呪縛の紐を緩めて、もっと規制の少ない環境に替えなくてはならない時期になっているんだ。地球上の人類の内、慈悲をベースにして生きる人の割合が確率的優位になりさえすれば、時代の変化の準備が整う。そのためには由宇の行っている激情に駆られて殺戮を繰り返したり、自分が生きるために人を搾取している者たち、快楽や美食を求めて足ることを知らない者達の負の極にある意識を正の極に180度転換しなくてはならない。負の極は正方向に向いた力とトリガーさえあれば一気に正の極に転換される。陰陽の陰から陽への移行と同じだ。一気にひっくり返る。それがアフリカで起き、西欧諸国で起き、新興国の食欲の中でも起きる。もうそれほど先のことではない」

「あなた、私はまだ確信が持てないのよ。だって、これまで多くの人たちが共和国の専制統治を打破しようとしてもできなかったでしょう。私達にできるのかしらって不安になるの」

「不安は禁物だ。おまえもよく知っているだろう。恐怖や不安はせっかく前進していることを逆戻りさせるばかりでなく、脇道に逸らせてしまう」

「ええ、分かっているわ。がんばらなくちゃ」

賢は祐子と共に一夜を過ごすことにした。祐子は賢の胸の中で、久方ぶりに子供に戻ったような安らかな眠りに落ちた。

翌朝、祐子は一人でレストランに降りることにした。賢は暫くしてから行くと言った。賢は祐子から位置情報端末を借りた。祐子が部屋の外に出ると案の定、メドリスナが部屋の前を護衛してくれていた。メドリスナはアルフォンと交替で歩哨に立ったと言った。祐子は感謝の言葉を述べて、メドリスナを伴ってロビーに降りた。

祐子が出て行くと賢は位置情報端末で部屋の中央の位置を記録し、一旦由仁の家にテレポーテーションした。梓が心配して待っていた。賢はこれから暫くはこのようにアフリカとの間を行ったり来たりすると説明した。梓も心配ながらも納得した。賢は梓にこれまでの経緯を簡単に説明すると、そのまま物質転送機の所に行き、予備の物質転送機をホテルの部屋に転送した。そうしておいて、自分もテレポーテーションでホテルの部屋に戻った。物質転送機は部屋の中央に届いていた。賢は直ぐにフロントに行き、今日の会議に必要なマシンを用意させてほしいと言った。フロントは賢が国連の関係者であると錯覚したようで、直ぐに特別室に案内した。賢は位置情報端末を用いて特別室奥の隅の位置情報を確認してからレストランに向かった。

祐子達がロビーを歩いているとレストランの前で日本人の3人組に出くわした。祐子は会釈した。昨日の8人掛けの席はそのまま残してくれていた。既にマリーとソニアが席に着いていた。挨拶を交わし、席に着くと、3人の日本人は意識してか、祐子達のテーブル席の直ぐ近くに席を確保した。間もなくジミーとベムがアルフォンと共に姿を現した。ジミーが言った。

「*****」(おはようございます。ママ、すっかり良くなりました。ありがとうございました)

「*****」(おはようございます。俺もすっかり良くなりました)ベムも微笑みながら言った。マリーが言った。

「*****」(ジミーはソニアに看病されたから直りも早いはずよ。ベムは私が看病したから、あまり具合が良くないかも知れないけど・・・)

ソニアが恥ずかしそうに下を向いてしまった。皆笑った。朝食はバイキングだった。もう全員がバイキング形式の食事には馴れていた。女性達は控えめに料理を取り、兵士達は大盛りを取った。全員が料理を自分の席にセットして着席し、会食の準備ができたとき、入り口から賢が入って来た。賢は静かに祐子の近くに来て側に立った。祐子はスワヒリ語と

英語をうまく使い分けて、全員が分かるように話した。

「***** Ken, could you speak something?」(会ったことのない人もいるから紹介するわね。我々を支援するために来た賢さんよ。ここで会うことになっていたのよ。今日は会議にも出席してもらおうわ。賢さん、一言おねがいします。)

賢は直ぐ近くに日本人のグループが居ることに気付いていたので、英語で話した。

「Good morning everybody. My name is Ken Uchimi. I came here to assist Mrs.Tsugunshou in the discussion today.」(おはようございます。私は内観賢です。私は今日の討論でツグンショウ婦人を支援するためにここに来ました)

賢の話を祐子がスワヒリ語で全員に伝えた。

「Ken, please take your food and come back here.*****」(賢さん、食事を取ってきてください)

賢はパンとチーズを皿に取り、直ぐに戻って来た。祐子とマリーの間に1席のスペースがあったので、賢はそこに腰を下ろした。3人の日本人達がひそひそ話を始めた。

「*****」(さあ、皆さん、それでは今日も食事を戴けることに感謝して食事を始めましょう)

祐子の声掛けで皆一斉に食事を始めた。マリーが賢に向かって英語で言った。

「When did you come here? We didn' t know it at all.」(いつお見えになったんですか?ちっとも知りませんでした)

「Last night.」(昨夜です)

「By airplane?」(飛行機ですか?)

「No.」(いいえ)

「So, You came here through Ruwanda, didn' t you?」(じゃ、ルワンダから入ったんですね?)

「No, I didn' t」(いいえ)

賢が素っ気ないので、祐子が間に入った。

「Mary, He came here like as Aki used to do so.」(マリー、彼は亜紀がしていたようにしてここに来たのよ)

マリーはそれがテレポーテーションだとは思いつかなかった。もう少し聞きたかったが、賢が食事を始めてしまったので、話し掛けるのを諦めた。賢の斜め後方から3人の日本人の話し声が聞こえてきた。声を抑えているようだが、賢にははっきりと聞き取れた。

「あの男、どこかで見た事があるな。確かテレビか何かで見た記憶がある」

「うん、俺も見覚えがある。顔はハーフみたいだけど、日本人の雰囲気なものな。会議に出るようだから、その時注意して見てみようか」

「君たち、こういう所で、個人の話はしない方が良いぞ」

食事を済ますと賢は祐子に「マシンを会議室に設置したい」と言った。祐子はメドリスナとアルフォンに手伝ってもらうことにした。物質転送機はそれほど重いマシンではない。2人にとっては簡単な仕事だった。特別室にマシンを設置してしまうと、賢は物質転送機のデモについて祐子に説明した。

特別室での国連事務総長との会談は予定どおり10時丁度に始まった。祐子は賢とマリーを自分のアシスタント、ジミーをフルマの職員として出席させた。特別室には既に3人の日本人が端の席に着いていた。4人が入って行くと、3人の男は起立して頭を下げた。祐子達は軽く会釈し、ドアサイドの席に並んで座った。部屋の角には物質転送機が設置され、電源が投入されている。3人の日本人は特にマシンを意識してはいないようだった。会議開始の30秒ほど前に国連の5人が入って来て祐子達の坐っている反対側の席の方に回った。5人は背広にネクタイを着用しており、昨日のカジュアルな姿から受けた印象とは一線を画していた。室内に居る全員が立ち上がった。中央に居るのがヘデン事務総長だった。祐子も賢もテレビで何度か見ている、額に深い皺の刻まれた顔だ。年齢は50歳代後半に見える、威厳を感じさせる黒人だ。ヘデン事務総長はテーブル越しに手を差し出しながら英語で言った。

「*****」(ご多忙中の中、時間を割いて頂いて恐縮です。私は国

連事務総長のエドワード・ヘデンと申します)

祐子も身体を前に屈めて右手を差し出した。

「*****」(わたくしの勝手を申し上げ、わざわざゴマまで出向いて頂いて恐縮です。わたくしは2年前にルワンダのキガリに設立した社団法人フルマの責任者を務めているユウコ・ツグンショウと申します)ふたりは握手を交わした。ヘデン事務総長に促され全員着席した。

「*****」(この戦闘地域にあつて、よくここまで無事に來ることができましたね)

「*****」(一人命を落としました。そして護衛の兵士2名が負傷しました。ガイドを頼んだ男性も一人怪我をしました)

「*****」(それは大変でしたね。この戦闘状況は混乱を通り越して、無秩序な混沌状態と表現した方が良いでしょう。国連も下手に手を出せないのです)

会談は国連の事務次官補ジョセフ・マクマランの司会で進められた。先ずヘデン事務総長が国連の進めているアフリカ救済同盟について、そのコンセプトと現状を説明し、フルマの活動に大変興味を持っているので、是非詳細を聞きたいと述べた。それに対してマクマラン事務次官補が祐子にフルマの説明を求めた。祐子はフルマの設立のプロセスを細かく説明した。特にそのコンセプトの中に愛の概念を入れていることを強調した。ヘデン事務総長は頷きながら聞いていた。特にフルマが行っているコーヒーなどの栽培の推進方法とアガセケ・バスケットなどの家内工業化の説明には興味を覚えたようだった。夫や息子達を喪った女性が自立できる道を与えるための資金貸し出しや、海外からの投資の呼び込み手法について、事務総長はフルマの運営でこれまで祐子が示してきた手腕を高く評価した。祐子の説明の後、質疑応答が行われた。日本人の3人もフルマの資金繰りや投資基準などについて質問を行った。質疑応答を終了させるとマクマラン事務次官補は言った。

「*****」(ここからは、先ほど事務総長が説明致しましたアフリカ救済同盟の活動について、ご意見を頂きたいと思います。2名の難民救済高等弁務官も出席しておりますので、ツグンショウ夫人、何か具体

的な取り組み方法などご意見がございましたらご説明ください)

祐子はこのときだと思い、気持ちを引き締めて話し始めた。

「*****」(先ほども申し上げましたように、私たちはルワンダという小さな国の中で、ルワンダの国民が平和に暮らせる道を模索してきました。ある程度その方向性がはっきりしてきましたので、これから次の段階に掛かろうとしています。それは、フルマの考え方を更に発展させた取り組みです。このアフリカという広大な大陸に生きている沢山の人があまりにも悲惨な生を強いられているという事実に対して、これをどう改善するかというテーマです。これこそが我々に課せられた次のミッションだと考えました。しかし、フルマは小さな組織です。フルマの力だけでそんな大それたことができるとは到底考えられません。世界中の良識ある国の支援が絶対必要だと考えました。そんな折り、国連の方からフルマに興味を持って頂けたので、絶好の機会と捉えました。我々も先ほど事務総長がお話になったアフリカの貧困国の支援策について、我々としての考えがあります。その最も重要なポイントは、難民を直接支援するという事です。国連の皆さんが一番ご存じだと思いますが、それは非常に難しいことです。何処の国にも政府があり、軍があり、支援金や支援物資を横取りするような非合法集団もあり、盗賊まで徘徊しています。トラックで支援物資を難民の村まで運ぼうとしても運搬途中で物資が消えてしまうような状態ですから、まずそれを何とかしなくてはならないのです。もう一つの問題はNGOなどの組織・・・フルマもその中の1つと考えることもできますが・・・では例えばエイズのワクチンやマラリアの免疫ワクチンなどを貧困地に送ろうとして、その輸送手段を確保しても、薬剤が入手できないという事実があります。生活のための食料などの救援物資もそうです。何処で入手したら良いのが簡単に判断できませんし、入手経路の確保についても非常に困難だと感じます。その上、十分な資金もありません。そのような状況の中で、我々は難民への支援物資の配送について1つの解決策を手に入れました。その手段を用いれば、配送の問題は解決します。これは後でデモを含めて説明します。となると、問題は食料や医薬品などの支援物資の入手です。

フルマはそれを国連と世界保健機構、赤十字社世界本部に協力してほしいと考えたのです。そして、国連、特に難民高等弁務官事務所と連携してアフリカ各国の難民に直接物資を供給する体制を構築したいと考えました。ヘデン事務総長、このフルマの提案をご検討頂けないでしょうか?)

ヘデンは直ぐに応えた。

「*****」(先ず、あなたのおっしゃる配送手段を具体的に説明してください。それが納得のゆくものでしたら、国連としてもあなたのご提案を真摯に検討させていただきます)

祐子は頷くと、おもむろに席を立った。賢も同時に立ち上がった。

「*****」(ヘデン事務総長、これからお見せするのはこれまでの常識では考えられないことです。そのことを念頭に置いてご覧ください。それでは、ここからの説明は、実際にデモを行う内観賢に替わります)

出席していた日本人の中の最年長の男がハッとしたような様子を見せた。

「*****」(私の名前は内観賢と申します。日本の株式会社内観システムズの社長をしております。只今から当社の販売している商品である物質転送機とオーラ・ビジョン・システムのデモをご覧ください。これはビジネスとしてのデモではなく、その機能を有効活用して頂くことを目的としたデモです)

賢は部屋の隅に行き、物質転送機の横に立った。祐子がヘデン事務総長の方に向かい、位置情報端末を操作しながら言った。

「*****」(ヘデン事務総長、今私の前には1冊のファイルがあります。これを内観の立っている床の上に瞬間移動させます。よくご覧になってください)

祐子が位置情報端末のボタンを押すと、賢は物質転送機を操作してから右手を挙げた。

「*****」(それでは、このファイルが瞬間移動します。ワン、ツー、スリー)

祐子の合図に合わせて賢が転送ボタンを押した。祐子の前のファイルが消え、賢の足下の床の上に現れた。

「ウオー」

皆それぞれに驚きの声を上げた。全員が立ち上がって床の上を覗き込むようにして観た。ヘデン事務総長が言った。

「*****」(一体、これはどうしたことですか？な、何が起こったのですか？詳しく説明して頂けますか)

賢が言った。

「*****」(物質転送機を用いて、ユウコ・ツグンショウ婦人の手前のファイルをここに移動させたのです)

全員が目を剥いた。あるものは賢を、あるものは祐子をじっと見詰めている。国連の4人は目の前の現象をはっきりとは理解できないようで、戸惑いの眼差しを賢に向けた。

「*****」(この地球上にあるものなら、どんなものでも、何処へでも瞬時に移動させることができます。今のところ、このマシンの機能としては、移動できる品物の大きさに制限を与えてありますが、その大きさの制限は変更が可能です。ただ、あまり大きなものは転送に巨大なエネルギーを必要としますので、このマシンでは移動させることはできません。せいぜい乗用車ぐらいの大きさの品物までとお考え頂きたいと思います)

ヘデン事務総長は立った状態のまま言った。

「*****」(ツグンショウ婦人、試しにもっと大きなものを移動して見せてくれませんか？)

「*****」(はい、何なりとお申し付けください)

ヘデン事務総長はテーブルの隅にある誰も座っていない椅子を指さし、それをその位置から部屋の外に移動して見せてほしいと言った。祐子は了解すると、椅子の位置を測定し、一旦部屋の外に出た。戸口に立って護衛をしていたメドリスナが姿勢を正した。祐子はメドリスナに会釈すると、壁の前の空間位置を測定し、メドリスナに少し離れているように言ってから席に戻って来た。賢がスイッチを押すと、椅子はたちどころに消えてしまった。ヘデン事務総長は席を離れて部屋の外に出た。それに続いて国連の随行者や日本人達も全員外に出た。事務総長が席に戻って来ると、祐子に向かって言った。

「*****」(私は知りませんでした。このようなマシンをいつ発明したのですか?このマシンは世界を変えてしまいますよ。うまく扱えば、地上から戦争を無くせるかも知れませんが、あるいはその逆で全世界を壊滅状態にしてしまうかも知れません。このマシンはそのような可能性を秘めています。ツグンショウ婦人、後でふたりだけでお話しさせて頂きたいのですが、如何ですか?)

祐子は了解し、賢も一緒に話に参加させたいと言った。事務総長は同意した。賢は続いてOVSのデモを行った。先ず由仁の研究室に用意しておいたOVSを会議室に転送した。それを目の当たりにした者達は、物質転送機が商品として実用レベルに達していることを実感した。賢の説明に従って事務総長は、半年前に訪問先のアビエイで命を落としたトミー・アギウス国連事務次官を呼び出して会話を行った。出席者は驚きを超え、狼狽し始めていた。そんな雰囲気の中で事務総長はOVSの画面に映ったアギウス事務次官と真剣な面持ちで話をした。ふたりの会話が終え、賢がOVSのスイッチを切ると、事務総長はヘッドギアを外しながら言った。

「*****」(このマシンについて、私はコメントできません。この世界について、これまでの私の認識を変えなくてはならないと感じています。今はこれ以上コメントできません)

祐子はそれを受けて言った。

「*****」(この世界に現在、これまで経験したことの無いような大きな変化が起きてきているということは事務総長が一番ご存じのことですが、このマシンは、この世界の急激な変化を捉え、地球上の人間が陥っている物質偏重の世界観から精神性重視の世界観に移行するのを支援してくれると期待しています。私は、このマシン、オーラ・ビジョン・システムも今回のアフリカ救済活動に利用しようと考えています。これからはアフリカが変化の先頭に立つ時代になるような予感がしています。勿論それには国連と世界保健機構、赤十字社ほか各ODAの協力と内観システムズの協力が不可欠になります)

ヘデン事務総長は頷いた。それまで暫く出番のなかったマクマラン事務次官補が、全員の興奮が収まるのを待って会議の閉会を宣言した。賢は物質

転送機を使って「梓、物質転送機を由仁に引き上げてください」と書いた紙を上に乗せたOVSを由仁に戻した。その30秒ほど後、物質転送機がその場から消えた。まだ会議室に残って話をしていた日本人3人がそれに気付いて、驚いて会議室内を見回していた。事務総長は場所を変えて話すことをふたりに提言した。

30分間の休憩を挟み、事務総長がひとりで小会議室に姿を現した。席に着くとヘデン事務総長は早速祐子達の取り組んでいる作戦についての説明を求めた。祐子はウグングと取り決めた作戦をかいつまんで説明した。事務総長はじっと考え込んでいたが、やがて何かを思い付いたように話し始めた。

「****」(考えていらっしゃることはおおよそ理解しました。1つお聞きしたいのですが、ウグング・ボンリガンボさんの組織は活動資金をどこから得ているのですか？彼らだけで今ご説明されたような準備ができるとは到底考えられません。背後にどこかの国があると思われるのですが・・・)

「****」(はい、私もその事が気になりましたので、ボンリガンボ氏に聞いてみました。でも彼は何処の国の支援も得ていなく、あの組織が個人出資者の集合だと言ったのです。アフリカ各国には、ブッシュマンのように自然に融合して生きてきて、今でもその生き方を維持している人たちと、西欧諸国の植民地政策の影響を受け、自分達も西欧諸国の人たちのような生き方をしたいと考え、その生活様式を真似て生きている人たちの2種類の人たちが居ますが、その西欧諸国の影響を受けた人たちも更に3つのタイプがあって、1つは物質的な裕福さを求めるグループ、もう一つは大自然の中で、西欧的な合理的な要素を取り入れ、自然と共存して生きようとするグループ、そして特に自分達で選択しているのではないけれど、周囲の動きに翻弄されて生きている人たち・・・この人達の多くは悲惨な生を強いられています、その3つのグループに分かれていきました。その自然と共存して生きようとするグループの中にはビジネス的な素養を持った人たちが多く居て、農作物や鉱物資源を海外に販売して財を築いた人たちがかなり居るのです。その人達は海外などとの取引で、常に政府や公

的機関の介入を受け、国内の非合法組織の邪魔や強奪に遭遇して、多くの損失を被ってきた人たちばかりです。彼らは同じような目に遭っている仲間と国を超えて連携し、それらの包囲網を潜り抜けてビジネスをしてきたのですが、彼らを苦しめている非人道的な国のあり方を正さない限り、全ての人々が希望を持って生きてゆけないと考えるようになり、何人かの有志が先頭になって組織化が行われていったのです。しかし、表立った活動をするると直ぐに国家や軍隊からの弾圧があるので、地下組織化して活動を続けてきたのです。それらの人々が苦境に喘ぎながらもビジネスを通じて手に入れてきた資金を拠出して、その組織の維持・運営を行ってきているのです)

「*****」(そうでしたか。私もアフリカ各国にも正義感に溢れたビジネスマン達が沢山居る筈なのに、彼らは現在の政府のやり方にジレンマを感じても、ただ黙って抑圧されているだけなのかと疑問に思っていました。今話を伺って、漸く納得が이었습니다)

「*****」(彼らの組織は、まさに民間主導の活動組織なのです。でもこれらの組織は、どちらかと云うと武装組織に近く、彼ら自身も自分達がテロ組織に間違えられる危険性を感じて怯えていました。私はこのボンリガンボ氏の組織に対して、武力的なアプローチを止めるように説得しました。ボンリガンボ氏もそれに同意してくれました。今後は先ほど説明させて頂いた様々な手段を使って、段階的に現在の各国の共和制政府を解体してゆこうとしています。勿論政府の姿勢が国民の平和を重視した方向に変化し、真の民主政治に変わればそれで目的の1つは達成できたことになりますので、各国政府に対してそれ以上急激な変革を迫るつもりはありません。政府が正常化したら、ボンリガンボ氏の組織は次の段階に入ることになります。次は貧困に喘いでいる国民の救済です。それも先ほど説明したとおり、輸送手段の確保によりある程度は解決します。救援物資の配給に物質転送機を使うのです。配送側とそれを受け取る側にボンリガンボ氏の組織のメンバーが入り込み、更に住民の有志を巻き込んで支援して行くことにするのです。食料や医薬品の配給です。これらの活動はこれまで国連やNPOの活動を通じて行われてきていますが、ある程度の末端の支援

が可能になれば、ODAを通して生活様式の改善指導やライフラインとインフラの開発支援なども可能になってくると思われます。更に重要なのはそこからです。経済的な基盤の確立です。私はアフリカに理想的な経済特区を築き上げたいと考えています。これは私の夢でもあり、同席の内観賢さんの考えていることでもあります)

事務総長の眼差しは一層真剣味を帯びてきた。

「****」(経済特区という考え方は、ユーロ圏やアジア経済特区構想で観てきたとおり、そこに属する経済レベルの異なる各国が自国の利益を最優先に考えるため、意思統一を図るのに時間が掛かり、理想的な形に到達するのがかなり難しいと思うのですが、その辺の所も考慮してあるのですか?)

「****」(まだ、構想段階なので、十分な検討ができていませんが、現在考えている構想の骨子を簡単に説明してみます。先ず始めに取り組むのは各国の経済的自立です。アフリカ共同体に属する各国にトーテムを設けます)

事務総長は怪訝な顔をした。

「****」(トーテムというのはアボリジニやアメリカ・インディアンなどの間で行われてきた自然界の特定の動植物などのことですか?)

「****」(概念はそれに似ています。しかし、ここで言うトーテムはあくまで、経済的な視点で見た概念です)

祐子は自分の提唱するトーテムは、各国の得意とする生産品目に独占的生産権を与えるという方式であり、他国はその品目を生産する場合その独占権のある国に許可を得なくてはならないようにするという貿易システムであるという説明をした。事務総長は「その考え方は面白いが、具体化するためには多くの課題があるだろう」と言った。祐子もそれには同意した。賢が話に加わった。

「****」(僭越ですが、一言話させてください。私はオーストラリアのアボリジニの人たちと少しの間生活を共にしてみました。そして、彼らの行ってきたトーテムの考え方は独占権と云うより、むしろ互惠の精神から生まれ出たものだと感じました。それは今のアフリカ経済にとって最も

必要な要素だと思います)

「*****」(それはどういうことですか?説明して頂けますか?)

事務総長は賢の話に興味を示した。

「*****」(この概念を正しく理解するためには、先ず、現在の経済システムに関する既成概念をお捨てになって頂く必要があります。現在の経済の仕組みはいかに生産を増加させるか、いかに利益を上げるか、という点がベースになっていますから、当然、前期と同じとか、前期よりマイナスという場合はそれを負の成果として捉えます。しかし、このトーテムの考えの出発点は全く異なります。いかにそのトーテムが繁栄するかという点に視点を置きます。その生産が増加しなくても、減少してもかまわないのです。そのトーテムによって自分達の国がいかに繁栄するか、いかにそのトーテムが守られるかという点が重要になります。現在の概念では繁栄は増産、利益というイメージで受け取られますが、ツグンシヨウ婦人の考える経済システムでは繁栄は喜び、幸福として受け止められるのです。具体例で示してみます。例えばAという国は自動車の技術にすぐれ、新製品も次々に生み出せるとします。また、Bという国は教育システムが優れているとします。また、Cという国はゴムの産出が世界でも群を抜いていて、Dという国はトウモロコシの産出で優れているとします。そのほかの国もそれぞれ得意な分野を持っている、あるいは育成しつつある得意な分野があると仮定すると、交易において、その製品あるいは産物に附いての管理権を全てその国に渡すわけで、この場合 D という国は、経済特区参加国の全てのトウモロコシの生産に対して責任を持つことになります。勿論Dだけで全ての国のトウモロコシの需要をカバーできる筈はありません。そういう場合はDの管理の下で、他国にトウモロコシの栽培を委嘱するのです。その生産品としてのトウモロコシは無償で経済特区内の国に配給されることにするのです。C という国はゴムです。これもDと同じように全ての責任を負います。Bは教育というサービスです。この国が中心になって他国の教育システムを構築して行きます。Aという国は全ての国の車の需要を担うことになります。勿論自国だけでそれを負うことが難しい場合は、他国に依頼して製造拠点を置いてもらいます。他国は自動車に関してはA国

の意向に従って、生産、販売をすることにします。自動車を製造するためには勿論様々な材料、部品、製造設備などが必要になります。それも全て、そのトーテムを持った国Aが主導権を持って、自国内だけでなく他国にも製造を委託します。17世紀のヨーロッパに起こった家内工業から分業化に移行することで大量生産を可能にした動きと同じような動きをこの経済特区に起こします。但し、それは儲け主体ではなく、相手の喜びを得る為の生産にすることです。その方向性が次の時代を担う社会システムの鍵になると考えています。そのためには現在の貨幣による取引のシステムを変える必要があります。特に貨幣そのものに価値を持たせることを改める必要があります。国民全員にトークンのようなidキーを所持させます。そのidキーは他の人や組織がそれを横取りしても、本人特定システムによって、悪用できないように管理します。そして、誰が何を購入したのか、どんなサービスを受けたのかという情報を、トークンのようなidキーに付帯させます。キーそのものに記憶させてもいいし、あるいは各国のセンターコンピューターに記憶させることもできると思います。そのトークンを提示することで、各人はそれを入手できる店に行き自分の必要とするものをいつでも手に入れることができます。その自由購買の仕組みは国の機関によって管理され、国民が必要以上の物品・サービスの提供を要求した場合は、その妥当性を判断するプレーキシステムを作動させるようにします。その国の現状に鑑みて、そのスレッシュホールド・レベル（境界値）をコントロールするようにします。ここまできると今度は、この経済特区以外の国との取引をどうするかという問題が生じます。その時だけ、現在の経済システムに準じた貨幣を用いて取引を行うのです。それぞれの産品は現在の経済特区以外の世界に於ける相場で取引することにすれば良いと思います。現在の経済システムからidキーを用いたシステムに移行する時期は、かなり混乱し、困難を伴うかも知れません。税金も無くします。その代わりに、国民は就労可能な年代には誰も皆働く必要があります。しかし、それは収入を得るための労働ではありません。人に対する奉仕としての労働です。その労働生産性の成果は全てトーテム生産の責任国が管理します。その働いた期間に準じて老後の保障を受けるレベルを決めるようにします。

しかし、若いときに働かないで生きた人間にも、老後を生き通せるだけの最低限の保障はします。食料生産を考えればその仕組みはわかりやすいと思います。例えばある国でトータルとして小麦の生産を行うのに100万人の人が携わったとします。ある人は大地を切り開き、土地を耕します。またある人は種から苗を作ることに従事します。ある人は苗を植えてから収穫するまで、田畑を管理します。ある人は収穫された小麦の精麦、袋詰めなどを行います。そして販売、配送を担当する人も居ます。それらの仕事に優劣は付けません。合計100万人が働いて、全経済特区内の人口20億人分の一年間の食料を生産するのです。小麦を生産した国は勿論自国の食料を確保した上で、それを特区内の各国に配分します。各国はその国から食料の供給を無償で受けます。そして、余剰の食糧は備蓄分を除いて経済特区以外の諸外国に輸出します。特区内では全員が必要な食料を得ることができます。これで食糧不足による餓死は防げます。中には怠けるものも居るでしょうし、人の何倍も働く者も居るでしょう。でも、それで良いのです。収入に差は付けません。働くことに喜びを覚えるものは働き、遊んで生きることにのみ喜びを覚えるものは、最低限の就労で最低限の食料や備品を与えられ、それで思い切り遊び続ければ良いのです。気付くまでそれを続ければ良いのです。「働かざる者、食うべからず」的な発想は排除します。唯、よく働き、知恵を持っているものが生産の責任者など上位に立つものとして受け持つ範囲を広げるのです。その人間にとってそれはこの世界での貴重な体験になってゆくのです。人生ではそれが最も大切であるということを、教育を通して特区内の住民に知らせてゆきます。土地は原則として個人所有を許しません。生まれたときに、誰にも将来一定の領域を提供することを約束し、成年に達した段階で独立して居住するための土地を与えます。そして死亡した段階で土地は国に返却されます。一切の個人所有を認めません。こんな説明をすると、それは共産主義ではないかと思われるかも知れませんが、何処の国も国民に就労の義務を課すことはしません。悪事以外なら何をしていても構わないのです。自国内に留まる必要も無ければ、経済特区の外に出て行くことも自由です。唯、特区内の1つの国の国民であることのメリットは計り知れません。その国の国民であ

るということは、生まれてから死ぬまで、母国が守ってくれる仕組みの中で生きているということです。その国のいくつかのトーテムを発展させるために努力をすること、そしてその成果を祝福しての祭り、トーテムを通しての他国民との連携、輸出を通じての経済特区外の人々との交わり、様々な形での発展があります。ツグンショウ婦人はその平和的な世界を実現しようとしているのです。本来は政府も、警察も、裁判所も必要ないのですが、一気にその段階まで行くのは難しいので、あらゆる所で働く人が完全に公平である事だけを守り、政府機関や警察機構、司法の場もそのまま継続させることにします。過去にあった共産主義国家の生産性の低下が起きないような仕組みを組み込む必要がありますが、それはあくまで仕組みの活性化のためであり、富裕な生活を得る為にあるものではありません)ヘデン事務総長は小さく頷きながら聞いていたが、賢が話を切ると、大きく2回頷いて言った。

「*****」(あなた方の考えておられる理想的な経済システムについてはおおよそ理解致しました。それが実現できたらどんなに素晴らしいだろうと思いますが、現実にはそれが可能かどうかということになると、残念ながらかなり難しいような気がします。私は、いきなりそのようなシステムに切り替えるのではなく、段階を追って実施してはどうかと思います。国民全体にidキーを配るというシステムは素晴らしいと思います。そしてそのidキーによって食料の配給を行うシステムは良いと思うのですが、そのidキーをどのように配るかということだけでも、困難であると思います。でもそれは何とか実現できたとしても.....)

事務総長の歯に物の詰まったような言い方を受けて祐子が言った。

「*****」(事務総長のご懸念は分かります。我々もやはり段階的に実施することを考えるべきだと思います。しかし、内観さんが取り組んでいる日本の実験サイトでは最初の段階からそのようなシステムを動かしてみるとのことです。経済特区の構想については、もう少し先の話になると思いますので、日本の実験サイトの結果を見てからでも良いのではと考えています)

事務総長は祐子と賢の説明に意を決したように言った。

「****」(分かりました。国連としてもあなた方の取り組みを後方支援致します。ツグンショウ婦人からの準備が整ったという連絡を待ち、赤十字社本部と世界保健機構本部に国連としての見解を伝え、アフリカ諸国に対する食料・医療支援のあり方に具体性を持たせるように示唆致します。実際には、ツグンショウ婦人と内観さんにそれぞれの機関のトップとの会談を行って頂き、具体的な支援の方法を取り決めて頂きたく思います。従来の支援のあり方を修正するだけで済むかも知れませんから、彼らもそれほど違和感を持たずにあなた方の提案を受けてくれると思います)

それから三人はもう一步踏み込んだ討議を行った。祐子は身体が打ち震えるほど嬉しかった。亜希子がコンゴ国民を救おうとして祐子を説得した時の必死な姿がまぶたに浮かび、祐子は心の中で亜希子に話し掛けた。

「亜紀、あなたの望んでいるような取り組みが動き始めるわ。私はあなたの分まで頑張るわ。観ていてね」

祐子は漸く自分の望んでいたことが実現に向けて動き出したという手応えを感じていた。

梓の気持ちは複雑だった。賢が漸く怪我から回復したばかりなのに、テレポーテーションでアフリカとの間を頻繁に行き来している。体力を消耗してしまうのではないかと気が気でなかった。もう一つの大きな気掛かりは、賢が永遠の伴侶と決めていて、それを自分に対してもはっきりと公言している祐子の存在だった。由仁の家を留守にしている間に、賢が自分の元を離れてアフリカに行ってしまうのではないかという心配で頭が一杯だった。そして、賢の部屋には亜希子の亡骸が横たわっている。梓は子供の頃、自分より2つ年上の従姉妹を失った。そのときに感じたのと同じ悲しみと死への怖れの入り交じった気持ちを何時も心の底に感じていた。日暮れに賢の部屋の前を横切るような時には、涙がこみ上げ、鼓動が激しくなった。そしてそれに反応したかのように、お腹の子供が小刻みに震えるのが感じられ、全身に戦慄が走るものがしばしばあった。そんな中で心を支えてくれたのは愛子だった。愛子はどんなときも朗らかで活発だった。賢が退院してから自宅で療養している間も、賢に対する心遣い以上に、梓のことを

気遣ってくれた。食事の支度と片付け、掃除、洗濯を手伝ってくれたし、学校の帰りには買い物をして来てくれた。梓はそんな愛子に対して、何時も「家事は自分でできるから勉強を頑張って」と口にしながらも、疲れて脚にむくみが出ているときなどは、嬉しくて涙が流れそうになるのだった。賢の行動に一抹の不安を覚えながらも、梓は自分の胎内に賢の子供が育っていることに、この上ない喜びを覚えていた。家に居るとき賢は直接愛の言葉を口に出して言ってくれることはなかったが、梓は賢が近くに居るだけで、いつもその大きな愛情のドームの中に浸っている感覚を覚え、完全に安心しきっていた。賢が不在になったとき、自分の感じていた安心感が失われるのではないかと心配したが、賢がアフリカにテレポーテーションしてしまった後も、意識を賢に向けるとそのドームのような愛の場はそのままそこにあって、自分を包み込んでいることが分かった。唯、暫く賢の姿を目にしないと、思考が自分に対して不安の気持ちを掻き立て、賢が祐子と共に居ることに対する嫉妬の念を湧き上がらせているのだということに気付いた。そんな複雑な気持ちの中に居て、ソファーでぼーっとしているとき、愛子が部屋に駆け込んで来た。

「梓さん、OVSが戻って来たよ。上に手紙が貼ってあったよ」

梓は愛子の差し出す手紙を手を取った。

「物質転送機を引き戻してほしいって」

「ふうん、物質転送機とOVSを何に使ったのかな？海外には販売しないって言っていたのに・・・」

梓は直ぐに研究室に行った。そして常設の物質転送機を操作して、アフリカのどこかにある物質転送機の位置情報を確認し、この研究室を移動場所に設定して転送スイッチを押した。物質転送機は直ぐに転送されてきた。梓は自分が賢の活動に全く関与していないことに虚しさを感じ、取り残されたような寂しい気持ちになった。そしてふと亜希子の事を思った。賢は祐子と亜希子のことを両方とも永遠の伴侶だと言った。そして亜希子は祐子と共に苦しんでいる人たちを救う為に行動を起こし、アフリカの地で命を落した。賢は自分の事も愛していると言った。しかし、自分に対しては永遠の伴侶という言葉は使わなかった。ただ「愛している」と言っただけ

だ。賢にとって、自分とは一体何なのだろうか？命を落とした亜希子とどちらが大切なのだろうかと思った。何時も賢が言うように、愛の大きさに全く差が無いというようなことがあり得るのだろうか？梓には考えられなかった。自分には賢しか居なかった。今後どんな素晴らしい男が現れても、自分の気持ちが微塵も揺れることはないと確信していた。

「梓さん、梓さん、どうかしちゃったの？ぼーっとしちゃって」

愛子の言葉で梓はふと我に返った。

「あら、ごめんなさい。……愛子さんには分かるかしら、私ね、あの人の赤ちゃんができてから、何故か自分が安定した生活を望んでいるってことに気が付いたの。愛子さんには愛する人がいるかしら？私にはあの人しか居ないの。勿論父や母のことはとっても愛しているわ。妹のこともね。それにあなたも、原さんも好きだけど、あの人に対する愛とは別の愛のような気がするの。ちょっと恥ずかしいけど、私はあの人と何時も一体だと感じているのよ。でもあの人には、永遠の伴侶という祐子さんと亡くなってしまった亜希子さんが居るでしょう。私はその愛の狭間にあって、あの人に愛されているとは分かっているけど、何となく満たされない気持ちがあるの。分かるかしら？そんなことを考えてぼーっとしてしまったのよ」

愛子は梓の側に近付いて来て言った。

「わたしは不器用だから、よく分からないけど、みんな愛しているよ。今のこの由仁の家が一番好き。とっても愛している人たちが一緒に居るからね。私はここに生きていられることだけで幸せだって感じるよ。私ね、賢パパからの受け売りだけど、愛って、条件を付けるべきものじゃないんだって思うよ。母が亡くなるまえのことだけど、私が失踪していて、その時賢パパが私を救うためにその頃母が住んで和歌山の家に来たの。そして、そこで母は賢パパと恋に落ちたの。賢パパのことを「たった今死んでも良い」と謂うほど愛してしまったの。賢パパは恋に落ちたというより、ただ母を愛したと言った方が良いかも知れないな。母は賢パパが無上の存在になったみたいなの。私が失踪から帰還した後でテレビのインタビューに応じて話した言葉があるの。その言葉は身体に染みこんでしまって、今も私の中に残っているのよ。「愛情はエネルギーみたいなものだと感じていま

す。初めは自分が誰かを愛しているとか、自分が誰かに愛されているという意識がありますが、愛が強まってくると、愛している自分と、自分が愛している相手との区別がつかなくなってしまいます。そして、更に自分も、相手も、無くなったようになって、ただ愛情の中に浸っているという意識だけになって、最後には意識というより愛そのものという状態になったような感じになってしまいます。一種の自己喪失です。唯、^{よるこび} 歓喜だけがあるような感じです」・・・もう暗唱しちゃったわ。私は賢パパが母を愛していたとき、いいえ、きっと今も変わらず愛していると思うけど、その愛が愛の自然な姿だと思うの。梓さん、考え過ぎない方が良く思うよ。賢パパは自分と相手の間に境界が無いのよ。相手も一人だけじゃないのよ。その時そこに居る人に対してはみんな愛してしまうのよ。だから、母のことも、梓さんのことも、私のことだって誰より一番愛している筈よ。梓さんのことも世界中で一番愛していると思うよ。祐子さんのことも、亜希子さんのこともね。ちょっと変だけど、原さんのことも、樋口さんのことも、もっとも男同士だから肉体的な接触は無いけどね。私も母が亡くなって直ぐの頃、賢パパの愛について疑問を抱いたこともあったわ。だけど、賢パパの愛が本当の愛だと思えるようになったのよ。だってそうでしょう。人のことを本当に愛したら、男と女だったら、賢パパと梓さんみたいになるでしょう。そして、それがあらゆる人に対してそういう心になるんだったら、みんなを愛しても何の不自然なこともないと思うのよ。むしろ自然なことのように思う。そうは言っても私は女だから、賢パパのようにはなれないけど。私は安定した1つの家族を作り上げたいと思うよ。それは梓さんと同じよ。そして私の旦那さんになる人には、私だけを愛していてほしいと思う。でも私のことを強く愛してくれるのなら、他の誰を愛しても良いとも思うよ。今はね。伴侶が現れたらそんな暢気なこと言っているかどうか分からないけどね・・・」

「わたしはあの人が好きなのよ。愛しているのよ。だから・・・」

梓と愛子はどちらともなく立ち上がり、亜希子の亡骸のある賢の寝室に向かった。ふたりはベッドサイドに立ち、亡骸に向かって瞑目した。梓は自

分の心の中のわだかまりが消えていることに気付いた。ふたりの頬を涙が伝わって流れた。ふたりは無言だった。

その晩は遅くなってから原が帰宅した。原は家に入ると直ぐに賢の寝室に向かった。亜希子の亡骸の前で両手を合わせ、しばし瞑目をしてからリビングに戻って来た。

「梓さん、もう休んだ方が良いですよ。悲しみや、不安は自分の身体にそういう場を作ってしまうから、思考を止めて、賢さんの愛情の中に浸って休んでください。お腹の赤ちゃんの為にも、幸せな世界に浸っているという感覚の中で休んでください」

梓は原の言葉に従って自分の部屋に向かった。愛子はそんな原の優しい姿を涙ぐんで見詰めていた。

梓は暖かい真綿に包まれているような、心地よさを覚えていた。その真綿が背後から自分に覆い被さってくるように感じて目を開けた。賢の身体だった。賢は梓の背に身を寄せ、梓の身体を抱き締めていた。梓はグルッと寝返りを打って身体を賢の方に向けた。

「お帰りなさい」

「梓、ありがとう。身体は大丈夫か？」

「ええ、私も、お腹の赤ちゃんも元気よ」

賢は黙って梓と嬰兒を抱き寄せた。

「あなた、私たちを捨てないでね。あなたが居ないと、とても不安なの」

「ずっと一緒だよ」

梓は賢の胸に顔を埋めた。少ししてふたりは眠りに落ちた。

翌朝賢が目を覚ますと梓の姿は無かった。賢は自分の部屋に行った。亜希子の亡骸は昨夜のままだった。頬はまるで生きているように瑞々しく、今にも起き上がって来そうに思えた。

賢は祐子の所から戻るとき、一旦霊界を訪れた。亜希子は賢の姿を認めると、駆け寄って来た。駆け寄るとは謂っても空中を滑るように移動してきたのだが、側まで来ると賢の胸に飛び込んで耳元で囁いた。

「あなた、ずっとお待ちしていましたのよ。ムクウさんがこの世界の仕組みを説明した本を沢山持って来てくださったのです。とても面白いことに

気が付いたの。ムクウさんのくださった本を読もうとして1ページめくると、一気にその本の内容が頭に入ってしまうのですよ。こちらの世界はとっても便利ですわ。ムクウさんがお戻りになるときに、あなたが由宇お姉様の所に助太刀に行っているから、帰りに寄るだろうっておっしゃったの。あなたがいらっしゃるのが分かってから、わたくし胸がドキドキときめいてきて、外に出てあなたのことお待ちしておりましたの。でもいつまでお待ちしてもお見えにならなくて、とうとう1週間も毎日外でお待ちしていました。両親も呆れていましたわ。わたくしもこちらの時間が現象界とは進み方が違うのをわかっているつもりでしたが、どうも、わたくしが待ちどうしいと思うと、時間の経つのが長くなるようですわ」

「待たせてしまって、ごめん。亜紀は今どうして過ごしているんだ？」

「わたくしは両親と一緒に家に住んでおりますが、朝のお食事を一緒にさせて頂いた後、そのまま講演センターに伺って、一日中皆さんにこの世界の仕組みについてご説明させて頂いておりますの。でもあなたがお見えになるとのことでしたので、この1週間は講演センターをお休みしていますわ」

「講演センターって、亜紀、すごいじゃないか。どうやってみんなを集めるんだ？」

「これもムクウさんに教えて頂いたのですが、瞑想して、これから説明しようとする講演の趣旨を頭に浮かべ、「皆さん、XX時に講演センターでこの世界の仕組みについてお話をいたしますから、集まってくださいね」って呼び掛けるのですわ。唯それだけでずいぶん大勢の人たちが集まってくださいました。ムクウさんは、今の段階では、その方法である程度分かっている人たちを集めることができるとおっしゃっていました。それが馴れてきたら、今度はもっと大きな広場のような所で講演をさせて頂きたいと思っています。ムクウさんは私たちの住んでいる世界よりもっと意識が地上に近い人たちの住んでいる世界で講演できるようになってほしいとおっしゃっていましたわ」

「つまりはエーテル界とか幽界とかだね。亜紀も頑張っているんだね。何とかまた一緒に生きられるようにするから暫くは頑張っていてくれよな」

「わかりました。あなたもご無理をなさらないでくださいね」

名残を惜しむ巫希子を残して賢は由仁の自分の部屋に戻った。そして巫希子の遺体を確認してから服を着替え、梓の部屋に向かった。梓は身体を壁に向けて眠っていた。梓の意識が不安定に動いているが分かる。賢がベッドの反対側に回り込んで梓の顔を覗き込むと、梓は目から涙を流していた。賢は梓に済まないと思い、ベッドに潜り込むと、梓を背中から抱き締めた。賢が顔を洗ってからリビングに行くとき梓が元気な声で挨拶した。

「あなた、おはようございます。疲れがとれたかしら？」

「梓、君の方が疲れているんじゃないのか？ずいぶん面倒を掛けたからな」

「いいえ、全然大丈夫です」

愛子と原と一緒にリビングに入って来た。それぞれ挨拶を交わすと賢に向かって原が言った。

「アフリカの方の首尾は如何でしたか？」

「ええ、祐子達は凄いことを考えているんです。何たってアフリカ全体を希望に満ちた明るい世界に変えようとしているんですから。そのスケールの大きい事ったらありません。世界中の国を巻き込んでしまうかも知れません。国連事務総長との会談を持ったんですよ。祐子の真剣な姿勢に押されて事務総長も協力の約束をしました。説得するとき、OVSと物質転送機が力を発揮してくれました。僕は夢物語でなくて、現実にアフリカは変わってゆくような気がしています」

「勿論その計画は秘密なんでしょうね？」

「そう、みんなには済まないけど、会談の出席者も知らないことなんです。事務総長と祐子と僕の三人しか知らないことです。だから、まだ誰にも言えないのです。許してください」

「許すなんて、とんでもありません・・・・でも興味あるなあ」

愛子も割り込んだ。

「賢パパ、どんなことかぐらいは教えてくれないの？」

「愛子、ごめんな。今はだめだ」

「さあ、さあ、食事が冷めてしまいますよ。皆さん、席に着いてくださいね」

「梓さん、お手伝いしなくてごめんね」

「いいのよ、愛子さん。今日は早く目が覚めたから」

賢の行動を一番知りたがっていた梓が、その事には一切触れず、明るい声で全員を食卓に誘導した。食事が始まると、賢が原に向かって言った。

「アフリカの着手は諏訪より早いかも知れませんよ」

「えっ？」

「諏訪はどの程度進んでいますか？」

「土地の借地契約が済みました。外壁の工事はあと一月あまりで終わりますが。サーバーシステムがあと3ヶ月ほど掛かりそうです。ハードは区民会館に設置しましたが、システムと端末の結合テストと検収が済んでいません。仮の運用はできると思いますが、トークンに情報を入れるだけですから、セキュリティなどの問題があります。賢さんに相談しようと思っていたのですが、いきなり実運用にゆくのはリスクが大きすぎるので、先ず特定地区を限定して試験運用したらどうかと思っています。それでしたら、PC数台で仮運用できますから。システムソフトは仮運用に耐えるプロトタイプを作成してあります」

「先日ドラフト（草稿）を見せてもらった運用マニュアルやガイダンス（導入説明書）はできましたか？」

「はい、完成しています。今日、事務所から持って来ます。一度目を通してください」

「それと、人員計画ですが……」

「僕の語録研究所の正会員の内の30人と賛助会員の中から意識の高そうな人20人を選出して契約を結びました。正会員は原則としてあの実験サイトに居住してもらいます。賛助会員の20名の内の7人は居住者になれるようですが、残りの13人はまだ態度を決めていません。僕がそこに居住するなら一緒に移り住んでもいいと言っていますけど……ですから、僕はあの実験サイトに引っ越そうかと思っているんですが、どう思いますか？」

「そうですね。システムの立ち上げと、試験運用がありますからね。そうして頂けると僕としても安心です」

「それではそうさせていただきます。それともう一つ苦戦していることがあります。既にご存じのことと思いますが、あの地域に元から住んでいた住民です。年長者が多いので、説得に時間が掛かっています。まだ半数ほどしか合意をもらっていません。皆さんが一番気にするのが自分達の資産の取り扱いです。そして、あのサイトの外の地域に働きに出掛けていた人たち、外から働きに来ていた人たちについても個別に相談しています。外との出入りが自由だということをいくら説明してもなかなか分かってもらえません」

「資産の取り扱いについては現状の制度から段階を追って変えていった方が良さそうですね」

「賢パパ、原さん、お仕事は会社でね」

「あっ、ごめん、ごめん。ずっと原さんや数馬に任せきりだから、つい気になってしまって。原さん、申し訳ありません」

「いいえ、僕は一向に構いません。では、続きは食後に」

賢と原が箸を手にして食事を掻き込むように食べ始めた。少しして賢が湯飲みを手にして一口飲んだとき、ふたりの食事の手が止まるのを待ってでもいたかのように梓が言った。

「あなた、祐子さんは大丈夫だったのですか？ 亜希子さんがあんな事になってしまったんですから、かなり激しい戦闘だったんでしょう？」

賢は箸を置いて言った。

「レストランで会食しているとき、祐子の会社フルマのメンバーが話しているのを意識で聞いていたんだが、どうやら、襲撃を受けても祐子には弾が当たらないらしい。それと、祐子は被弾して瀕死の重傷を負った負傷者をその場で治療して、回復させてしまうらしい。メンバーは祐子のことを女神様のようなだと言っていたよ」

梓は頷いたがそれ以上質問しなかった。

翌日の午後、無菌処理を施した棺が届いた。棺屋は「どなたがお亡くなりになったのですか？」と訊ねた。賢は「海外の友人が亡くなって、遺体の腐敗を防ぐ為だ」と言った。棺屋は棺を海外に送るものかと思ひ込んだようだった。賢は棺屋に指示し棺を居間の奥に仮置きしてもらった。棺を賢

の部屋に移動し、亡骸を納めるのは原が帰ってから行うことにした。ふたりは賢の部屋に亜希子の亡骸を見舞った。

「亜希子さん、絶対戻って来てね」

梓の声に、応えているかのように亜希子はその抜けるように白い顔にほほ笑みを浮かべていた。

賢はアフリカから戻ってから3日してから仕事に復帰した。それまでは由仁の家で決済の業務や方針の決定を行っていたが、久しぶりに工場に顔を出した。家を出る前に棺に納められた亜希子の亡骸を意識に貼り付けた。梓もこの日から一緒に職場に復帰することにしていて、原と3人で工場まで歩くことにした。工場の事務所は由仁の家から徒歩で10分ほどしか掛からない場所にあったが、久しぶりに屋外を歩いてみると、自然が身体に同調してまるで空中を飛ぶ鳥のような感覚を覚えた。工場の敷地から離れたところにある事務所も、工場同様大人の背丈の倍もある高さの塀で囲まれていて、まるで刑務所のような印象を与える。この事務所の塀も、外部から工場に対して攻撃を受けた際に一緒に構築した。入り口のゲートも厳重なセキュリティで守られていて4、5人のガードマンが24時間常駐している。3人がゲートに近付くと、ガードマンたちが敬礼をした。オフィスビルに入って3人はそのまま社長室のあるフロアに向かった。既に席に着いている14、5人の事務員が一斉に立ち上がって頭を下げた。賢は全員に向かって挨拶をしてから、2人と共に社長室に入った。社長室内の会議テーブルの席には既に事業部長の鈴木と製造統括部長の青木、数馬の会社マトラ・システムの営業統括部長笹刺が座っていて、賢が部屋に入ると3人とも同時に立ち上がって挨拶した。

「社長、今日は先ず、事業部長から最近までの状況報告をしてもらいます。それからOVSとMTSの受注状況と生産状況に附いて営業統括部長と製造統括部長に説明してもらいます。その後、私と今後の戦略について打ち合わせして頂くということでいかがでしょうか？」

「それで良いです」

原の改まった言葉に、賢も社長としての対応をした。梓は記録帳を広げて

その日のスケジュールを壁のホワイトボードに書き込んだ。賢は療養中も原から報告を受けてはいたが、一応デスクの上に置かれた月次の製造販売レポートに目を通した。海外への販売を始めたこともあってOVSの売り上げの伸びは、賢が事故に遭う直前同様、半期の販売計画を遙かに上回っていて、月産15000台の大台に乗る一步手前まで来ていた。製造統括部長は工場の新設計画と人員計画についてその見通しを説明した。OVSだけでも手狭なのに、物質転送機MTSに対する引き合いは更にその上をいっていて生産能力の10倍以上にもなっていた。事業部長が言った。

「社長、事後報告になってしまいますが、最近警戒しなくてはならないことが起きています。先週の水曜日に国土交通省の事務次官から「物質転送機の販売計画に附いて説明してもらえないか」という問い合わせが入ったのです。その直ぐ後に、財務省の証券担当から株価の急騰について、話しを聞きたいという申し入れがあり、その翌日、証券取引等監視委員会から監査を行うとの通達を受けました。我が社としては何の負い目もありませんから、了解の返事をしておきましたが、それでよろしかったでしょうか？」

「それで良い。しかし、どうして政府の関係筋が動いているのかな？売り上げ急増に附いての反応だけとは思えない。何かありそうだな」

「社長、私もその事が気に掛かっています。競合があるわけじゃないし、MTSやOVSの販売で間接的に損害を被る企業が直訴でもしたのかも知れません」

「うむ。それで公正取引委員会の方はどうなった？」

「独禁法という点からは、当社の経営に非を見いだすことができなかつたようです。あれから何も言ってきません」

「分かった、ありがとう。青木くん、後でMTSの製造現場を見せてくれないか？従業員はオーバーワークになってないだろうな？」

「社長のご指示がありますから、原則残業はさせておりません。臨時従業員は一定期間の就労の後、最長でも3ヶ月後には全員正規として採用しています。当然派遣は一人も使っていません」

賢は青木製造統括部長と一緒に工場に移動した。社用車でゲートを出る

と、賢は異様な雰囲気を感じた。確かにどこかから観られている。賢は意識を全方位に開いた。祐子や梓、まして巫希子からの意識ではない。どうやら遠方から観察されていることが分かる。しかし、その意識は途切れ途切れで方向がはっきりしない。

「青木くん、最近この辺りに当社以外の大きな建物の建設があったか？」

「いいえ、当社に関係した建物以外に大きな建物はできていないはずです。先週、当社に部品を卸している会社との共同倉庫がここから300メートルほど先に新たに2棟建ちましたが、そこは倉庫ですから、管理人と資材担当以外は居ません。今日立ち寄られますか？」

「いや、いい。ありがとう」

工場の前に大駐車場がある。工場に入るゲートはオフィスビルのゲートより一層警戒が厳重だった。社長の乗っている社有車であっても、ガードマンがトランクの中と車の足回りのチェックを行った。沢山のトラックが工場の側面に荷台を付けて製品の搭載を行っていた。工場内に入ると、いつの間にかMTSの製造部長がふたりの後に付き従った。賢は青木に案内されて工場内を視察した。製造ラインは部品実装からアSEMBリまでは直線ラインで、組み立てはU字ラインが組まれている。直線ラインは無人化されていた。U字ラインはあまり整然とした感じは受けないが、賢はこの方式が一番効率が良いと思った。

「ずいぶん若い人が多いな。こんな辺鄙な所じゃ通うのが大変だろうな」

「社長、彼らは賄い付きの独身寮に入っています。U字ラインの担当や検査係などは札幌や苫小牧など遠方から通っているものも沢山います」
賢がU字ラインの後ろを通り掛かったとき、そこで働いていた35、6歳の従業員が一旦組み立ての手を休め、ふたりの方に振り向くと、つかつかと近付いて来て、頭を下げて言った。

「統括部長、少しお話しできますか？」

「一体何だ？社長もおられるんだぞ」

青木がそう言うと、背後にいたMTS製造部長が慌てた。

「青木くん、聞いてやりなさい」

賢は従業員の顔つきに焦燥感を観て取った。

「あ、あのう、僕はこの間の日曜日、札幌ラーメン店で隣に居た男から物質転送機の事を聞かれました。僕は「知らない」の一点張りで無視しようとしたのですが、しつこくて、「工場見学をしたい」とか、「工場のリクレーションで外の間人間が入れるときはあるのか」とか聞かれました。僕ばかりじゃなくて、札幌から通っている奴が何人か尋ねられています。同じ男じゃないようですが……心配なので、報告した方が良かったと思います」

「ありがとう、だけど、どうして部長か課長に言わなかったんだ？石垣くんは聞いてないのか？」

賢は石垣製造部長に向かって言った。

「はい、申し訳ありません……き、君、そういうことは先ず私か課長に相談するものだ」

「済みません。部長にも課長にも言いにくくて……仕事のことじゃないから」

賢が言った。

「ありがとう。とても参考になったよ。社則にあるように、外では絶対工場内の話しをしてはいけないよ。君は良く守ってくれたようだな。立派なことだ。今度不審な男が近付いて来たら先ず課長に相談してみると良いよ。その方が問題が早く伝わるだろう」

「はい、わかりました」

従業員はU字ラインの作業場に戻った。

賢は石垣部長に先ほどの担当者を叱らないように言った。工場視察を終えると、製造部長は職場に戻って行った。賢は青木の案内で休憩室に向かった。休憩室は食堂の隣に造られている。ふたりがテーブル席に着くと白衣に白いキャップを被った中年の女性が部屋に入って来て、賢たちの近くにきた。

「あの一、社長さんでいらっしゃいますか？」

「ええ、そうです」

「私、食堂で働かせて頂いている者ですが、ちょっと相談したいことがあります……」

「どうしたんですか？」

「はい、最近のことなんですが、スーパーで買い物をしているときアラフォーだとおもうんですが、女性が近付いて来て、とびきりの特売品があるからちょっと来てみないかと言われたのです。私も主婦ですからそのアラフォーに附いて行ったのです。そしたらスーパーの果物売り場に立派なマスクメロンと甲州ブドウが通常の80%引きで売られていたのです。私がそれを籠に入れてレジで精算すると、そのアラフォーが「もっと安い良品が沢山あるけど、ご覧になりますか」と言うので、つい、後に附いていったのです。そしたら、スーパーの隅にワゴン車が1台停まっていて、そこに昆布やわかめ、煮干し、するめなんかが普通の1割ほどの値段で……」

「君、何の話をしているんだ？社長は忙しい方なんだぞ」

「まあ、青木くん、そう言わずに……で、それからどうなったんですか？」

「わたし、急いでいろいろな物を買ったんです。そしたら、アラフォーが「私たちは特売システムを使っているからこういう値段で売れるんですよ」って言うんです。そして「私たちは価格を抑えている分、沢山売りたいから、あなたの会社の人たちを紹介して頂けないかしら」と言ったんです。私は別に何も変だとは思わなかったんで、「いいですよ」と応えたんです。そしたら、「あなたが協力して頂けるようなので、お礼に、あなたの働いている職場に飾れる記念品を差し上げます。それで、どんなお仕事をされているのですか？」って聞かれたので、「社員食堂で働いています」って応えたんです。そしたら、アラフォーは「食堂の各テーブルに飾ると良いと思います。月に1度新しいタイプの飾りを用意しますから、古いのを持って来てくれれば交換します」って言ってこんな物をくれたんです。一度に10個もくれたんです。私はそれを職長に見せたんですが、職長は箱の中身を確認してから、「それなら邪魔にならないから飾ってみたらどうだ」って言ってくれたのですが、私は何となくしっくりこない気分だったので、誰か偉い人に相談しようと思っていたのです。さっき社長さんの姿が見えたので……これなんです

が・・・」

そう言いながら、女性は袋から紙の箱を取り出した。それは高さ20センチほどの花瓶と薔薇の造花を一体にした置物だった。非常に精巧に出来ていて、ちょっと見ただけでは本物とってしまうほどの品物だった。賢はそれを女性から受け取って意識を集中してみた。直ぐに電気仕掛けの装置が中に組み込まれていることが分かった。強い電磁波の放射は無いようだ。話し声の音声が電気信号に変換されているのが分かる。

「これは、どうやら周囲の会話を傍聴して録音する装置だな。発信機能の無い盗聴装置だ」

「わたし、どうでしょう」

「社長、盗聴ですか？」

「うん、食堂での会話を盗聴しようとしたようだな。アラフォーの女性は多分この盗聴器から直接情報を得ようなどとは考えていないだろう。人間関係や個人の特徴を掴もうとしているんじゃないかな。社内の機密情報を引き出せる人間を探そうとしているんだろう・・・この造花はもう飾ったのですか？」

「申し訳ありませんでした。先週の月曜日に所々のテーブルの上に飾ってしまいました」

「そう、それじゃ、それを全部集めてください。青木くんそれを原研究所長の所に持って行って、内容を消去してもらいなさい。それから、あなた、その消去した物をアラフォーの女性に返してください。しかし、消去した後は、原所長が言うと思いますが、密閉した箱の中に保管して、周囲の声の聞こえないところに遠ざけておいてください。良く気が付いてくれました。ありがとうございます。今後もしこういうことがあったら直ぐに報告してくださいね」

「はい、わかりました」

女性は造花を箱に収め、それから食堂に入っていくと急いで他の造花を回収して廻った。

「社長、中に盗聴器がある事がどうして分かったのですか？」

「意識を集中させれば、誰でも分かるんだよ。人間には本来そういう能

力もある。だけど殆どの人はそんなことはできないと思い込んでいるし、ずっと受け身で生きてきているからそういった能力を使うことができないんだよ。青木くん、君を非難しているわけじゃないよ。殆どの人がそうだからね」

「社長はすごいですね。社長、ところで、工場見学は如何でしたか？」

「なかなか良くできているじゃないか。これで今の製造能力は受注残の10分の1なのか？月産何台まで可能なんだ？」

「はい、3000台が限度です。でも現状は2000台ほどがやっとなです。部品の調達に間に合いません。現在全力で調達先の確保に取り組んでいます」

「増産せずに、暫くはこのまま様子を見よう。このマシンは造りすぎると、設置先を追跡できなくなってしまう危険性がある。戦争にでも使われたら大変なことになるからな」

「はい、そのことは肝に銘じています。CS部隊が納品した全てのマシンの現在位置と使用状況を把握していますが、やはりあちこち盪回しされているマシンもかなりあるようです」

「海外に流れている物は無いでしょうね」

「経済産業省がMTSとOVSを戦略物資に指定しているから、正式なルートで海外に出る事は無いと思いますが、密輸や他製品とのコンテナ混載で隠して持ち出される可能性は否定できません」

「その場合は自動追尾システムで所在が分かるのではないのか？」

「はい、今のところそのような形跡はありませんが、今後も起きないという確証は持てません。一旦電波の届かないところに持ち込まれ、行き先を掴めなくなったら、それ以降追尾する手段を失ってしまいます」

ふたりはそれから暫くの間、顧客管理に附いて話し合った。賢は現在の管理方法では物質転送機が海外に持ち出される危険性がある事を認めざるを得なかった。

その日5時近くになって、東京から数馬が来た。数馬は「今夜は賢の家に泊まり、翌日諏訪プロジェクトのことを打ち合わせしてから戻る予定だ」と梓に言った。梓は数馬を社長室に案内した。

「よう、元気になったみたいじゃないか、良かったな。もう働いても大丈夫なのか？」

「うん、ありがとう。心配を掛けたな。おかげさんで何とか出勤できるまでになったよ」

元気そうな賢の受け応えに、微笑みを浮かべて数馬は言った。

「梓さんも元気そうじゃないか。おまえも漸く一安心だな。ところで、祐子や亜希子さんは元気なのか？一体いつまでアフリカで頑張るつもりなんだ」

賢はふたりの女性の現況については、数馬には一切伝えていなかった。

「おまえには言ってなかったが、実は亜希子さんは亡くなった」

「な、何だって！言って良い冗談と、悪い冗談があるぞ」

「本当のことだ。アフリカの戦闘に巻き込まれて亡くなってしまった」

「よっ、よく平然としてられるな。一体いつのことだ？」

「5日前だ。テレポーテーションして駆けつけたが、間に合わなかった。彼女の魂は、現在霊界で暮らしている。この世界での亜希子の遺体は俺の寝室に安置してある」

「どういうことだ、詳しく説明しろよ」

数馬の顔からほほえみが消え、厳しい表情に変わった。賢は顔色も変えずに淡々と話した。

「今日、家に泊まるだろう。後でゆっくり話すよ……ところで数馬、今朝、おまえの所から来ていた笹刺統括部長からOVSの販売状況について聞いたが、凄^{うち}い伸びを続けているようだな。もうそろそろ、MTSのことも面倒みてくれないか？MTSはうちの製造統括部に販売組織を置いているだろう。これまではそれで何とかなってきたが、最近の急激な販売増加では営業を独立させないと会社が廻らなくなってきそうなんだ。MTSはOVSとは勝手が違うだろう。厳重な顧客管理が必要で、それも複雑だからな。今後の販売について、どうしたら良いかおまえの意見を聞きたいと思ってな。できたらMTSの販売もおまえの所に移管したいと思っているんだ」

「うん、そのことは分かった。だが、亜希子さんのことが気になってし

ょうがない。おまえは平気なのか？俺はまず、亜希子さんに会わないことには何もする気になれない。今の件は明日にしよう」

賢は梓を呼んだ。

「社長、お呼びでしょうか？」

「今日は定時で引く。君もな。車で長沼のスーパーに寄って食材とワインを買って帰ろう。原さんにも一緒に引くように伝えてくれないか？」

「はい、分かりました」

暫くして終業のチャイムが鳴り、少しして原が姿を現した。原は数馬と挨拶を交わした。数馬が作り笑いで挨拶しているのがはっきりと分かる。4人は社有車で長沼のスーパーに立ち寄ってから由仁の家に帰った。数馬が暗い顔をしているので、賢も原も話し掛けるのを控えていた。家に着くと数馬は直ぐに亜希子に会いたいと言った。賢が数馬を寝室に案内した。梓と原もふたりの後を附いて来た。亜希子の亡骸は上部が局面状の全面ガラス張りになった棺に納められていた。

「亜希子さん、どうしてそんなに早く亡くなってしまったんですか？どうして危険が迫ったときテレポーションしなかったんですか？」

数馬は亜希子の棺の前で合掌しながら亜希子の顔を覗き込むようにして言った。

「だけど、まだ生きてるようじゃないか。賢、本当に亡くなってしまったのか？・・・おまえ、確かに確認したんだな」

「残念ながら、本当のことだ。亜希子は意識が純粹で自己の本体にまで通じているから、肉体の機能は停止しても、細胞が冬眠のような状態になっているんだ。死後硬直も起きないし、腐敗も進まない。勿論こういう無菌の棺に納められているということもあるがな。おれは亜希子を必ず蘇生させるつもりだ。だから、ご両親にも言ってない」

「それはまずいんじゃないのか？藤代社長が知ったら、ただじゃ済まないぞ。それに奥様だって・・・」

「もし亡くなったことを伝えたらどうなると思う？」

「・・・それは・・・確かに、遺体は直ぐに運び去られるだろうな・・・そうか、火葬か・・・葬儀を行ってしまったら、もう蘇生のチャ

ンスが無くなるということか……」

「そうだ。だが、確かに隠し通せるかどうか危ういな。兎に角、蘇生させるまでは、あらゆる手段を使って亜希子の死を隠し通すつもりだ」

「うむ……どうして亡くなってしまったのか、詳しく話してくれないか？おれは亜希子さんの最近の動きをほとんど知らなかったからな」

「いろいろなことがあった……まあ、リビングで話そう」

4人はリビングに戻った。

「数馬、おまえは祐子達のやっていることをどの程度知っている？」

「誘拐事件の後、祐子が自分の身を犠牲にして誘拐された人たちを救ったことは知っている。テレビで放送されたからな。その後で、祐子がアフリカのどこかで生きていう噂は耳にしていたが、おまえは俺に何も話さなかつただろう。だから俺もあえて訊かなかつた。唯、祐子も亜希子さんもアフリカのどこかで元気に生きてるものとばかり思っていた。俺も甘いな」

「これは絶対他言するなよ。特に藤代さんには絶対秘密だぞ。祐子は誘拐されたあと、いろいろなことがあつて最終的にはアフリカの中央部にある、あのジェノサイドで100万人の仲間が殺されたルワンダのブチ族の兵舎に売られて行つた。そこで、負傷兵の看護や指導を命じられ、やがてブチ族の族長の妻となつた。その族長が敵対していたクツ族の襲撃を受けて殺されてしまつた。ブチ族は祐子を族長の座に据えた。その頃から祐子には超常的な力が現れてきた。祐子はフルマという慈善会社を立ち上げた。そのフルマの力もあつてブチ族の人々の生活が安定し、クツ族との仲も改善していった。祐子がブチの族長になって少しした頃、亜希子が祐子の元に行くことになつた。亜希子は祐子の元で恵まれない人々の救済に身を捧げる生き方を選んだ。祐子がフルマを安定化させることに取り組んでいる間、亜希子は靈的なアプローチで既に亡くなつている多くの人たちの魂救済の活動を続けた。時間を見てふたりはスーダンの難民救済に出掛けた。ふたりはコンゴ民主共和国の悲惨な人々のことを捨てておけず、フルマが軌道に乗つたのを契機に小隊を造つてコンゴに入った。道中戦闘に巻き込まれ、亜希子は命を落としてしまつた。

大体こういうことだ」

「祐子も亜希子さんも凄まじい生き方をしているな。俺など足下にも及ばない。彼女たちのどこからそんな慈悲と勇気が湧き出してくるんだろう。それにしても、こともあろうに、あんなに美しいふたりの娘が揃いも揃って自分達のを去ってアフリカに行ってしまったんじゃ、藤代社長ご夫妻の心中も押し量って余りあるな。俺なら気が狂ってしまうかも知れない。藤代社長は手を尽くして捜索しているんだろうな」

「それは当然さ」

「亜希子さんはどんな風にして亡くなったんだ？」

「祐子は自分の意識で何でもできるということを悟ったんだ。襲撃を受けた時もどンドン戦場に出て行ったようだ。しかし亜希子に対しては絶対危険な目に遭わせたくないという意識があって、車で移動中に奇襲を受けたときも、自分が車から飛び出すときに、亜希子には中に残るように強く言ったようだ。亜希子は祐子の事が気掛かりで居ても立っても居られなかった。窓の外で、祐子と護衛兵が敵に連行されて行きそうなのを観て取ると、亜希子は敵を脅して、祐子達を奪い返そうとしたようだ。テレポーテーションを使って、近くにある高い木の天辺に移動し、木から木に空を飛ぶように移動したんだ。コンゴの人たちは霊的な現象を極度に怖れるようで、観ていた兵士の殆どは驚愕して、退散しそうになった。しかし、指揮官の男がムキになって亜希子を射撃した。亜希子は被弾して、木の天辺から落下した。その後また戦闘があって、祐子は敵の手から逃れて直ぐに亜希子の元に駆けつけたが、亜希子は祐子の腕の中でこときれてしまった。祐子は直ぐに俺を呼んだが、俺が駆け附けたときには、亜希子は既に死後誰もが経なければならないプロセスを通り抜け霊界に行ってしまうていた。残念なことだが俺には銀線が切れてしまった死者を蘇らせることはできない。残された可能性は、現象界と霊界に跨がる拡張された意識を使って次元を変換し、亜希子を蘇生させることだけだ。魂の純粹さのレベルが高い存在は、この現象界と霊界の間に本来境界は無いということ魂のレベルで体現することができる筈だ。そういう意味で亜希子にはまだ現世に蘇生できる可能性が残されてい

る。だけど、これは亜希子にとっては一時的な魂の後退になってしまうけどな」

「俺にはおまえの話しているその霊界についての話は全く分からない。それと祐子や亜希子さんに備わっている超能力についても、俺の知識からはいかなる回答も出てこない。おまえの言葉からすると、亜希子さんは死んでいないということになるのか？」

「いや、この世界の中の亜希子の肉体は間違いなく死んだ。だが、この宇宙の根元的存在が亜希子の肉体を維持することに決めているようだ。それは同時に亜希子自身の魂の純粋さから来ていることになる。おまえも知っているとおりの魂は永遠に生き続けている。だから、条件さえ揃えば生き返ることができるということだ」

「賢、こんな話をするのは久しぶりだな。今夜はここに泊めてもらうから、後でおまえの認識している世界について教えてくれないか？それと、どうしたらおまえの謂う次の世界に相応しい生き方ができるのか教えてくれないか？俺もOVSやMTSの販売をしている会社の社長として、口先だけじゃまずいと感じているんだ」

「分かった。俺の知っていることを話すよ。だが、祐子と亜希子については、彼女たちのためにこれ以上は話せない。それは分かってくれ」
入り口のドアが開いて愛子が入ってきた。

「ただいま！あつ、樋口の小父さん、こんばんは、いらっしやい！」

「愛子、お帰り」

「おかえりなさい」

賢と梓の優しい応答に、数馬も心が和むのを感じた。

「愛子ちゃん、元気？ 学校頑張ってるか？」

「うん、勉強してるよ。それにバレエもしてる」

「小父さん、亜希子さん、亡くなっちゃったよ」

「うん、さっき寝室で会ってきたところだよ。亜希子さんって、凄いなだったんだね。自分の命より人の命の方が大切な人だったんだから」

愛子はソファに腰掛けながら言った。

「だけどね、亜希子さんは「自分は人を助けたいって思うから、まだだ

めだ」って言っていたよ。その点、祐子さんは人と自分の区別が無いから、苦しんでいる人に対しては、自分がその苦しみから抜け出そうとするだけみたい。そうすると自然にその人の苦しみが消えるみたいだよ。ふたりとも神様みたいな人たちだよ」

梓がキッチンから出てきて声を掛けた。

「皆さん、食事の支度ができました。テーブルに移ってください。愛子さんも鞆を置いたら直ぐに来てね」

「はい」

全員がテーブルに移動した。「この家には全体に穏やかな空気が流れている」と数馬は感じていた。愛子は直ぐに戻って来た。テーブルの上には毛ガニ、ブリ大根と肉じゃが、イクラと雲丹と烏賊の刺身の盛り合わせ、烏賊めし、小松菜のゴマ和え、レタスとトマトのサラダ、らっきょうとニシンの漬け物が並べられていて、白ワインとワイングラスが並べられていた。

「ごちそうじゃないけど、北海道っぽい食事にしたわ。数馬さんは久しぶりの北海道でしょう」

「やあ、凄いいごちそうじゃないですか。社長の秘書室長にこんなごちそうを造らせてしまっただけなのかな」

愛子が言った。

「ほんとだ、毛ガニまである。すごーい」

「いやね、愛子さん、いつもたいしたもの食べてないみたいじゃないの」
ワインでの乾杯から始まった賑やかな食事だった。賢の意識はこの場への意識と同時に常に亜希子の遺体と祐子にも向いていた。いつしか賢の目から涙が流れ落ちた。梓はそれを見逃さなかった。

「あなた、どうなさったの？」

「いや、この場の喜びに満ちた感情と同時に意識に悲しみが流れて込んでいてね」

「悲しみって、亜希子さんのこと？」

「俺から発している気持ちじゃないよ。受け取っているだけだよ。心配しなくても良いよ」

それは祐子の悲しみの感情だということが賢には分かっていた。

食事が済むと全員ソファーに移動した。数馬が原に向かって言った。

「原さん、この家の住み心地はどうですか？」

「僕はこの上なく幸せです。自分の考えていることがここでは何の制約もなく実現できますし、周りは僕の好きな人たちばかりでしょう」

「感情の衝突や軋轢のようなものは無いのですか？」

「一般的にそう言われる状態はありますが、そう感じないから、そうじゃないんでしょうね。賢さんの受け売りじゃないけど、全て自分の意識ですからね」

「原さんも賢と同じ考えなのですね。それじゃ、賢にこれからどうやって生きていったら良いのか話してもらおうかな」

賢は自分に振られて、軽く頷いた。

「何を話そうか？」

「普通の話じゃつまらないから・・・そうだ、どうしたら賢のように時空間を超えて意識を移動させたり、消えたり出来るようになるのか教えてもらえないかな？」

「教えることはできるけど、聞いたからと言ってそれが出来るようになるかどうか分からないぞ。それでもいいか？」

「いや、やっぱり、賢のようにそれがコントロールできるようになってみたいな。できるだけ手を掛けずに、実現する方法を教えてくれないか？」

「うん、分かった。特に難しいことは無いけど、根気は必要になるぞ」

「根気なら、誰にも負けない」

「賢パパ、私も聞いていてもいい？」

愛子が言った。

「いいよ、別に特別のことじゃないから、原さんも梓も是非聞いていて」
2人は微笑みながら頷いた。

「今から話すことは、俺が幼少の頃、アリゾナのセドナの磐の上で今は亡きスワミ・ヴィリユカナンダから教わったことだ。現在はあまり公に活動していないが、当時DC財団という名称の、人々にシンクロニシ

ティ現象を顕現させる手法を指導していた組織があって、その財団が教えていたインドのヴェーダに書かれている悟りの手法を、師匠のスワミが俺に伝授してくれたんだ。これまでずっと忘れ去っていたんだが、この間の事故の後で、「自分には必要なときにシンクロシティ現象が顕れる状態になっている」という認識が蘇ってきた。当時俺はスワミから教えを受け、ただ言われたことを実行するだけだった。何のことかさっぱり分からなかったが、今となってみれば、この頃に受けた教えが俺の生き方の元になっていて、その結果、他の人にはできないいろいろなことができるようになったのだと思う。俺が超能力と謂われるようなことができるようになったのは、みんなスワミと俺を支えてくれた人たちの力だと思っている。数馬、だから、この話を聞いても俺から聞いたと思わないでくれ。これはあくまでスワミの教えなんだ。そのスワミも別のスワミから教えて頂いたと言っていた。インドのグルは書籍で学ぶことはしない。全て自分の師からの教えを受けて、叡智を授かっているんだ。まあ、前置きはそれくらいにして、数馬はインドにヴェーダーンタという哲学があるのを知っているか？」

「うん、聞いたことはある。確か、ヴェーダと関係しているんじゃないか？」

「ヴェーダーンタは詩的文書ヴェーダの最後尾に当たるウパニシャッド哲学の神髄を抽出した哲学だ。本来人間は宇宙の根元神と同じという考え方に基づいて、人間が持っている能力とそれを顕す意識のあり方に附いて説いている。何千年もの間、数え切れない賢人達はその謂わんとするところを解釈し、それに従って行に挑んできた。しかし、残念ながらどんな文献を調べても、霊界に出入りし、空を飛び、バイロケーションをし、テレポーテーションを行い、天耳を駆使し、透視を行い、テレパシーで通信したというような人についての公の記述は見当たらない。一方で沢山の伝説が残っていることも事実だ。それはそのようなことをした人がタオ仙人のように意識的にこの社会から身を隠してしまった所為でもあるようだ。ところで数馬は人間に附いてどう捉えている？」

「俺は、人間という存在は、この世に生を受けた途端に、ひとつの独立

した存在としてこの世界を生き抜くように運命付けられていると考えている。肉体があり、肉体の心臓部分に魂が宿り、肉体に付随して神経があり、その神経を通して肉体を制御する脳があり、脳に付随して思考する自我があり、自我から発生する心があると観ている。そして、この70兆を超える細胞にはそれぞれ脳からの指令を受け取って自身で活動できる生命があり、決められた使命を持って活動していると考えている。細胞同士が連携して人体が構成されているのだと思う」

「そうか、そういう認識なんだな。じゃ、死んだ後はどうなると思う？」

「死んだ後は魂だけが残り、生前の思考、意識、心のあり方に従って、その行く先が決まるのだと思う。生きていたときに考えてきたこと、行ってきた記憶が思考として残るのだと思う」

「数馬、ウパニシャッドの中に、人間を喩えた表現があるのを知っているか？「魂は乗り手、肉体は馬車、ブッディは御者、心は手綱、インドリヤは馬、そして感覚の対象は彼らの進む通路であると知れ」という一説だ。ブッディというのは知力、インドリヤは感覚器官のことだ。実にうまく言い当てている。インドの哲学では、死んだ後、肉体も、知力も、心も、感覚器官も、そして通路さえも無くなると捉えている。俺もその通りだと思う。魂しか残らない。その魂にいろいろな属性が付帯して死後の世界に向かうのだと思う。ここまでは数馬の認識と同じだ。だが、人間がこの世界に存在しているときのあり方については、おまえの考えている、「自己は個として独立して存在している」という部分を白紙に戻してみてください。ひとまずそう捉えておいてくれませんか？これから話すことを理解するには、その前提が最低限必要になるからな」

「俺にはよく分からないが、おまえがそう言うのだから、ここではそういうことにしておこう」

「よし、じゃ説明する。数馬、早速自分の意識が自分だけじゃなくてあらゆる存在と共有されると考えてみて。つまり、自分はここに居る自分だけじゃなくて、隣に居る原さんも自分で、愛子も自分だと思ってみて」

「それは難しいな。俺は俺で、原さんは原さんだからな。まして、愛子さんは女性じゃないか」

「数馬、思考を止めなくてはだめだ。これは強制じゃないから、自分が意識を切り替えることでしか、次のステップに進めないんだ」

「いや、済まない。つい今までの物の捉え方で考えてしまう・・・そうか、考えるのもだめだな・・・そう感じてしまうんだ。頑張ってみるよ」

「うん。それじゃ理論的なことはひとまず置いて、誰でも簡単に超能力を得られる方法を説明するよ。勿論簡単とは謂っても、方法が簡単なだけで、これから言うことをずっと維持できないと、実現は無理だと謂うことだけは肝に銘じておいてほしい。ウパニシャッドにはマントラつまり「心音」という言葉が記されている。その「心音」というのはその音を発音すると宇宙の根元にまで届く、延いては宇宙全体にまで影響させることができる音ということになっている。それに意志の作用や教えを加えたものがスートラだ。音と共に意念を集中することで、自分の意図したことを達成できるとされている。仏教などでは経もこの類に入る。だが、現在の経は単なる音の羅列で、真にその意志を認識して唱えることのできる者は殆どいない。ウパニシャッドには人間の本質を蘇らせるためのスートラがいくつかある。その中で特に効果のあると謂われているスートラを説明するよ。スートラを唱えるとき、言葉の意味は別に意識しているんだ。サンスクリット語の発音で唱えろよ。まず、「Aham brahmsmi (アハム ブラフマスミ)だ。「我は神なり」という意味のスートラだ。自分の中心は究極の实在であり、形のない存在で、永遠に不滅であって、あらゆる存在の源であると意識してこのスートラを唱える。それが完全にできれば本当は他には何も要らないんだが、実際は人間は複雑な想念が絡みついているから、そう簡単にはいかない。だからあと6つのスートラを使う。心を空しくして、唯このスートラを唱え続けることだ。自分の中心があらゆる存在の源なのだから、当然あらゆるものと結ばれていることになる。自分はなぜここに存在しているのか？それはあらゆる存在の目を通して自分自身の映し出された世界を観る為なのだ。ここで数馬は疑問を抱くだろう。「俺はここで賢の話しを聞いている。しかし、俺の部下の笹刺は今頃東京に戻って事務所で今日

の業務のまとめを行っているだろう。俺と笹刺の観ているものも、考えていることも違っている。これは一体どういうことだ？」とな・・・そう、それが事実だ。そしてその笹刺も実はおまえ自身なんだ。だが、意識が数馬という肉体の殻の中に閉じ込められているから、笹刺を自分だと認識できない。まして笹刺の考えていること、観ているもの、聞いている音を認識できはしない。それができるようになる為には、意識を拡大する必要がある。それは他のストラの時に説明する。それと、おまえの観ている物と笹刺の観ている物が違っているというのも錯覚に過ぎない。物質的には同じ物を観ると、同じような感覚を覚える。それは母体が同じだからだ。俺はよく夕陽の例を引くが、100人が夕陽を観れば100人が同じようにその印象を受け取る。しかし、その後の反応はそれぞれの個人で異なる。その異なった反応をもって、夕陽を観ても100人居れば感じることは100様だと思ってしまう。もっとわかりやすい例で言うと、おまえが青い空を観る。その空の色は笹刺の観ている空の色と同じなんだ。これが奇跡以外の何物でもないことに誰も気付いていない。同じ物を観て同じ感覚を覚えているんだ。分かるかな？白い物は白いんだ。赤い物は赤い。甘い物は甘い、辛い物は辛い、暖かい物は暖かい、痛いと感じるとげは誰に刺さっても痛い。誰にとっても同じ感覚なんだ。それは根元がひとつだからだ。もし我々の根源に繋がっていない宇宙人が居たとして、そいつがこの宇宙の外から来たとする、白い色を赤いと感じるかも知れない。痛いと感じるとげも冷たく感じるかも知れない。暖かい飲み物もかゆいと感じるかも知れない。この世界に存在する物は全て同じ事象に対して同じ感覚を覚えるのだ。五月蠅く吠える犬に石を投げつければ、犬は「きゃん、きゃん」と泣いて痛かったことを表現する。車が近付けば、路肩に捨てられた残飯の上をうろついていたカラスはさっと飛び立つ。これが奇跡以外の何物でもないことに気付いている者はどれほど居るだろうか？」

「賢、そういう物の見方をすると、なるほど、自分と他人とが同じだと感じてくるな。おまえは譬えがうまいな。だが、人間ならともかく、カラスと俺が一体なんて思いたくもないな」

「そういう固定概念は捨てることだ。俺も、腐った犬の死骸に湧いたウジも同じなんだ。それは全てを統べる存在の意志なんだ。この世界に現れているものは全て自己の本質の投影なんだ。まあ、いきなりそう言ってもすんなり受け入れられないだろうから、次のスートラについて話すよ。そうするともう少し現実味を帯びてくる。2番目のスートラは「tat tvam asi (タト トバム アシイ)」だ。直訳すると「汝はそれである」という意味だ。自己と絶対存在は同一だと宣言するのがこのスートラだ。自分の中に他人の姿を観、他人の中に自分の姿を観る。それがこのスートラで導かれる意識の方向だ。このスートラを唱えるときは、自分の魂はあらゆる物の中に存在していると思うことだ。このスートラを具体的に甘受するためには、全ての人自分が自分を映し出している鏡だと見なすことだ。鏡に映った他人の姿は自分の姿で、自分の最も好きな特性が他人の姿の中に見えると感じ、自分の最も得意とすることが他人の中に顕現しているのを知ることだ。その反対に、自分の最も嫌な特性、それも他人の中に顕れていると見なす。それをさらに拡張して、全ての生き物、そして石や水、全ての存在が自分を映し出していて、全ての存在が認識している物を自分も同時に認識しているから見なすことだ。このスートラを四六時中唱え、今説明したような意識と結びついた状態になると、全ての存在の認識を持つことができ、透視や天耳の能力が現れてくる筈だ」

「そんなに簡単に透視能力が身に附くのか？」

「いや、簡単じゃない。潜在的な意識が「自他は同一だ」と見なせるようになることも難しいが、それをコンスタントに維持できるようになるのはもっと難しい。だが、不可能じゃない」

「俺にできるかな？」

「やる気があればできるさ。そこで、次は唯相手と自分が一体だという認識を持つだけでなく、本質的な特性を認識する為のスートラだ。「sat chit ananda (サット チット アーナンダ)」、直訳すると「真実と智と至福」という意味だ。真実は愛そのもの、それは自分の本源、すなわち宇宙の本源の持つ特性だ。だから、愛と智を達成するとそこに至福の

平安が現れると謂うことだ。つまりは、「私の魂は束縛から解放され、意識は活性化し、至福に満たされた状態にある」という意味だ。これは有名だから聞いたことがあるだろう？」

「どこかで聞いた様な気もするが・・・いや、やっぱり知らないな」

「自己から生まれるパワーには2種類あって、ひとつは物質的なパワーで、金銭的な面や名声など物質的要素や人間関係などから生まれるパワーだ。これは時間と共にいずれ消え去ってしまうもの、もうひとつは内面から生まれる霊的なパワーで、死んだ後も続くパワーだ。この2番目のパワーを手に入れると、このスートラにある真実すなわち愛の意識、智慧、そして至福の状態が体現できて、意識は安定し、外界の異変に乱されることがなくなる。だから、どんな艱難辛苦に遭っても微動だにしない。常に自己は本質に立ち返っていて、あらゆる問題にも直ぐに解決策を得られる。それは丁度自己の中心から炎が立ち上り、辺り一帯の存在に愛の光を降り注いでいるかのようだ。自分の周りの存在はその愛を受けて、自己と結ばれ、自己の周囲に集い、憩うようになる。ここまではいいな。次は4番目のスートラ、「samkalpa (サンカルパ)」だ。

「意念」という意味だ。これはウパニシャッドでも強調されているが、俺自身はこの世界で何かを創造しようとしたとき絶対欠かせない要素だと思っている。だから、泰山の修行僧にどうしたら空中浮揚できるようになるかと聞かれたとき、できるという意念を現在の1000倍強く持つことだと応えた。自分の意志にはあらゆる物を無限の彼方まで組織化し、構築してゆくことができる力があると思っている。意志や意念の集中と謂うと、とかく心を一点に貼り付けて、それに常に意識を向けていることを想像してしまうだろうが、それは執着で、意念の集中とは違う。執着は対象に左右された結果だが、意念の集中は自己の主體的な意識に基づくものだ。この意念の集中では、自己の願望を出してはだめだ。願望は物事を成就することを遠ざけるし、また怖れや疑念を抱いたら、一気に意念の集中状態が切れ、元の状態に戻ってしまう。それと「意念の集中は心臓から引き出される」という意識を抱く必要がある。「意念の集中でできないことは何もない」という自覚が必要だ。病に苦しんでい

る人を救い、失敗を犯した人を立ち直らせ、悲しみで落ち込んでいる人を救うこともできる。自分は意念の力で自然界に存在している物を動かしたり、新たに創ったりすることができることを認識する必要がある。あらゆる自分の行為がこの世界に生きるあらゆる存在を救い、世界に利益をもたらしてゆくことを自覚することだ。どうだ、ここまでくると聖人の領域に近くなっているだろう。初めのスートラ「Aham brahmsmi (アハム ブラフマスミ)」が展開してゆくと、人々が奇跡と呼ぶことが次々に起きてくるんだ」

「賢、おまえは凄いな、そういうことを全部実現しているじゃないか。実際そんな厳しい修行をしていたのか？」

「イエスでもあり、ノーでもあるな。スワミに附いて、いろいろなことをしたことは覚えているが、何をしていたのかもよく分かっていなかった。最初は楽しくて仕方なかった。忍辱の修行辺りから、つらくなってきて投げ出しそうになったこともあった。しかし5年間もそれを続けられたのは俺を支えてくれたスワミや両親、友人達のおかげだ。現在自分に様々な力が出てきているのはあの頃の修行の成果が現れてきている所為かとも思える」

「そうか、そんな修行をしなくちゃならないんじゃ、俺など到底無理だな」

「いや、それがそんなに難しいわけでもなさそうだ。修行をしてゆくと次第に超能力が身に附くというわけじゃない。ある日突然にいろいろなことが出来るようになるんだ。唯、その時の自分のあり方が問題だ。意識が澄み渡り、心が自己の中心に留まって乱れず、常に自己の内側に向けた瞑想状態で生きていれば、そういう機会は頻繁に訪れると思う。おまえだって心は安定しているじゃないか、唯、外側を向いている意識を内側に向けて、全ては自分だという認識で生きていれば、必ずそういうチャンスは巡ってくる筈だ」

「そうか、その言葉を聞いて、なんか安心した。一寸自信が湧いてきた」
「それじゃ、次のスートラの説明をする。「moksha (モクシャ)」というスートラだ。moksa (モクシャ) とは「解放」という意味だが、束縛

から解放された状態のことだ。輪廻からの「解脱」の意味も含まれている。この世界に生きている一般の者にとっては、感情に左右されない安定した状態を得ることだ。人から何か言われたり、嫌なことをされたりしたとき直ぐに憤慨するようじゃあ到底このスートラを達成することはできない。それに映画や演劇の様な楽しいことや、旅行やグルメみたいな快楽、美しい景色や美人の様な魅力的な存在に意識を奪われてしまう状態になるのも好ましくない。どれも心が掻き乱されていることになる。このスートラを唱えるときは「自分は肉体を持たず、つまり、肉体の束縛から解放されていて、肉体に付随する感覚、思考からも解放されている」と思うことだ。外部で起きたいかなる出来事、自分に向かって来るいかなる攻撃に対しても、全く動じないことだ。習慣となっている行動から自由になり、それに対する無意識の反応もしないことだ。自分の感覚が受け取った情報には自分で選択して反応する。つまりは一切外側の出来事に捕らわれず、自分の意識で行動することだ。これならできそうじゃないか」

「いや、俺にとってはそう簡単なことじゃなさそうだな。旨そうなものがあると、知らないうちに口の中に唾が溜まってくる。感動的な映画を観ると、ついほろりとしてしまう。なかなか難しそうだな。心を安定させて中道を行けということのようだな」

「そうだな。本当は、そう意識していることも良くないんだが・・・まあ初めのうちはそんな風で良いかもしれないな。これで5つのスートラを説明した。今度は6つ目、「shiva-shakti (シバ・シャクティ)」というスートラだ。これは元の意味としては「シバ神と一般にはパールバティと謂われているその妻神、つまり女性要素シャクティの一体化」を意味している。人間は誰でも数多くの転生の中で、何度となく男として生まれ、また女として生まれている。だから、誰しも自分の中に男性的な面と、女性的な面の両面を持ち合わせている。このスートラは、その誰でもが持っている自分の中の男性面と女性面を統合して、自分の原型を見い出すことを意図している。この自分の原型は自己の本源からこの世界に自分を投影するときに作用するものだ。自己の本源 — 核は全て

の人にとって共通だが、この原型はそれぞれの人の個性を作り出すものだ。その原型があるが為に、我々は人を別の存在として認識できる。素晴らしい仕組みだが、その一方で、自我を作り出す元にもなっている。原型が作用して自己が現れている限り、その原型を掴まなくては、本源の自己にまで到達することはできない。この原型は宇宙の中にコスミックダンスを生み出して、世界がこの上なく至福と喜びに満ちて動き出すための仕組みなのだ。だから自分の内面に意識を集中してこのストラを唱え、自己の原型を捉えて、自己の本源にまで至るのが悟りへの近道なんだ。これはこの現象界での具体的な創造の力を導き出してくれる。シバ神の特性とパールバティの特性を併せ持つと、この世界では何でもできる。自分の意念によって男にも女にもなれる。強靱な身体を持ったアスリートにも、美しく愛情豊かで、慈愛に満ちた女神にもなれる。さらに変身してこの世界に存在するどんなもの、獣にも、鳥にも、魚にも、虫にも、そして草や木にも、岩にさえなることができる」

「賢、俺はもう附いてゆけない。自分が鳥や魚、まして石になるなんて、神話や童話や物語の世界の話、あくまで架空の話としか考えられない。おまえは、本当にそう思っているのか？」

「俺はまだ自分以外の存在になったことはないが、それができることは何となく分かっている。自分がテレポーションしたときに、一時的にこの世界から肉体が消えて、別の時空間に入っている状態になるが、その別空間での自分自身はこの世界とは違った細胞の構成をもつ身体でできていることを実感していた。もっと正確に言うと、唯震動している要素が集合した状態で、肉体と呼べるかどうか分からない状態になっていたんだ。もし、この段階で意志を働かせれば他の存在に変身することができそうだと感じていた。実際、バイロケーションをやったときは、意識で周辺の物質から肉体を構成する分子を集めるという方法を用いて模写した肉体を創った。だからその時、もし他の存在になろうと意図すれば、そうなっていたと思う。勿論その状態は他の人の目には異常な現象としてしか映らないだろうがな」

「うーん、俺には失踪もテレポーションも経験ないから、どうして

もおまえの言うことが実現可能だという感触が得られない」

「まあ、その事は一時置いておいて、7番目のスートラを説明するか？
それとも、もう止めておくか？」

「いや、続けてくれ。俺には理解できなくても、黙って聞いている原さんや、愛子さん、梓さんには別の受け止め方があるだろうし、せっかく6番目まで来たのだから、最後まで説明してくれないか？」

「わかった。そうだ、原さん、梓、愛子、何か意見や感想があったら、言ってくれても良いんだよ」

原が軽く頷いて言った。

「さっきの6番目のスートラが誘導する個人個人の原型は、丁度僕の語録の「複留」と同じ概念だと思います。僕はこの宇宙に「複留」が無数にあると見なしています。個人という立場から観ると、表現としては「複留」より原型の方がしっくり来るかも知れませんが、僕の概念では、同時に、それを人間存在の核と現象界を繋ぐ通路のような捉え方もしています。つまり、人間は自分自身を核から現象界に展開するとき、ひとつの固有の型に基づいて同時に世界を創り出していると捉えています。だから、その原型の中には個人を創る型と同時に世界を創る型も含まれていると見なせると思います。ベクトル空間の留数のような概念が相応しいと思っています。その複留からこの世界が顕現しているから見なしているからです。そして、それぞれに現れ出た世界はその個人の世界であり、同時に他人の世界と重畳していると考えています」

賢が唸った。

「うーん、すごい。僕はこの「shiva-shakti (シバ・シャクティ)」というスートラだけでも凄い概念だと思っていたのですが、原さんの考え方を聞いて、そちらの方がより実際の世界に近いような気がしてきました」
数馬が言った。

「俺には、もう理解できない。つまりはこの世界は複数の、いやはっきり言えば70億の人間と、その個人にとっての個別の世界が重畳した世界だと謂うことを原さんは言っているんですね」

「はい、その通りです・・・あっ、喋りすぎですね。済みません。賢さ

ん、次のスートラをお願いします」

愛子が拍手をした。梓も拍手をした。原が照れて頭を掻いた。

「久々に原さんの語録を聞いて、胸が躍りました。さて、第7番目、最後のスートラだが、「ritam (リタム)」というスートラだ。絶対的真理という意味の rta (リタ) をサンスクリットで発音したようだ。リグ・ベーダの詩人達が持っていた「宇宙の絶対真理」という概念から来ているようだが、その後多くの聖人によってそれが「宇宙の真実」 satya (サティヤ) の元になる絶対的真理として存在すると謂うことが唱えられるようになったようだ。その理法にかなった真理からこの世界が創り出される。だからその真実を違えては、到底本源にはたどり着けない。先ず自分自身が真実である事。それは即ち愛の権化である事を意味する。その状態で自我が消え、宇宙の絶対真理と一体化できると、あらゆる奇跡が起きる。特にそれがシンクロシティとして顕現する場合が多い。よくあるだろう、アルバムの整理をしているときに昔の級友の写真が出てきて、その級友のことを思い出して、どうしているだろうと思っていたら、空港でその級友にばったり会って、昔話に興じることができたとか、医師から癌で余命3ヶ月という宣告を受け、残された余生を田舎で暮らそうと思って、売り家を探していたら、偶然見つかった売り家の隣の家に自然療法士が住んでいて、その人に自然療法を施してもらい、命を救われたとか。そう謂った例は数えたら切りがない。確率的に殆ど0に近い事象が、さも用意されていたかのように起きる。実は事前に用意されているのだが、それに気付いていなくてはならない。これがシンクロシティと呼ばれる現象だ。このスートラを唱え続ければ、次第にそのシンクロシティの起きる確率が高まり、それが日常茶飯事になってくる。何か問題があるときは、いつでもその解決策がシンクロシティとして提供される。つまり、自分の思ったことが実現するようになるというわけだ。それも自然に与えられる形でだ。これはどういうことか分かるか、自分で何かをするわけじゃない。自分の望んでいることを叶えてもらえるのだ。そのためには、完全に自我を空しくして、宇宙の根源的存在に全托する。自分が整然とした宇宙のリズムに同期して生きているという

ことを常に認識している必要がある。つまり、そう、まるでコスミックリズムに合わせて身体が音楽を奏で、その音楽に合わせてコスミックダンスを踊っているとでも言った方が良い状態をつくることだ。そのコスミックリズムとは何かだが、それは自分の能力と可能性を信じ、あらゆる存在との関係を、喜びを持って受け入れると同時に、自我を捨て、透明な愛と慈悲の心に満たされ、何時も感謝して生きているときに、心の奥に響いてくるリズムだ。この現象界にある自分の意志で奏でる音楽ではない。これが七番目のスートラだ。これら七つのスートラの言わんとしていることは勿論そう簡単にできるわけではない。第1のスートラの唱える、「自分の意識の中に自分の核は宇宙の根元と一致していて、そこから全てが展開している」と謂うことが腑に落ちない限り、このスートラを進めてゆくことは難しいだろうし、真実に近づくことは無く、勿論奇跡など起きようも無いと俺は思う。一寸手厳しい言い方かな？」

「賢、ありがとう。俺は今日この家に泊めてもらって良かった。こんな貴重な話をおまえから聞けるなんて思わなかった。俺は俺でそれなりに、自分に正直に人に優しくということをもットーに生きてきたつもりだったが、自分の甘さに気が付いたよ」

「数馬、そんなことは無いよ。おまえの生き方は素晴らしいし、おまえのダイナミズムは俺にはとても真似ができない。おまえもこの世界に生まれ出た限り、それなりの使命を持っていると考えるべきだ。俺は、おまえがこの日本を理想の国に変えてゆく原動力になるような気がする。今説明した7つのスートラはこの現象世界で早く悟りに到達するためのひとつの秘法に過ぎない。だが、それができたからと言って、この宇宙の根本原理が何ら影響を受けるわけではない。俺はスワミから教えてもらった秘法をおまえに説明しただけだ。自分に向いていないと思ったら忘れてしまった方が良い。まして、真理を知ったなどと思わない方が良い。真理は知るものではなくて、体験するものだ」

「うん、分かった。だけど今の説明だけじゃあよく分からない部分もあるな。説明書きなんかがあるとありがたいのだが・・・」

「そうだな、スートラだけでは一寸難しいかも知れないな。だから大昔

から悟りを得ようとする人たちは様々な修法と呼ばれる修行を通して悟りに到達しようとしてきたんだ。マントラやスートラ、ヨガや座禅、荒行や気功などだ。その中でもスートラを唱える方法が最も簡単で、到達しやすい修行法だ。しかしその前に自分の心身の邪気を取り除いて、とりつかれた習慣や執着を一掃して、自己を空しくするとより一層悟りに到達しやすくなるようだ。その一番簡単な方法を教えるよ。それはこの肉体を使った修法、「気功」だ。人間にはいろいろな「気」と呼ばれる質があるが、中でもストレスや汚染物質などが原因で体内に蓄積した邪気、これが問題だ。それがマントラの邪魔になる心身の乱れや雑念の原因になる。気功の修行をするとそれらの質を変えることができる。更に鍛錬するとそこから新しい気の質が生まれる。すなわちそれが超能力に繋がるんだが、そういうものが現れてくる。これはスートラで導かれる経路とは別の道だ。気功を続けてゆくと、人間の様々な感覚が敏感になってくる。音や色や味、臭いなどだ。それから場を全体として捉えられるようになる。さらにそれから第6感といわれる第3の目の感覚が目覚めてくる。つまりインスピレーションだ。それはさっき言ったシンクロニシティと同じものだ。それが高じると透視や天耳も可能になる。それじゃあ、どうやったら良いかと言うことだが、「天人合一」の状態をつくり出すことだ。気功の目的は気を精・気・神と変化させて、最後に天地、つまり宇宙とひとつになってそこから無限の叡智を得ることだ。初めに臍下にある下丹田に気を集める、それが精。そこに至る過程で体調が整い、活力が生まれ、病気などがあればそれも治ってゆく。次に気を養って胸にある中丹田まで気を上昇させる。それが精・気・神の中の気。胸にある気は愛と慈悲の念と結びつく。それから気を眉間にある上丹田まで上昇させる。そこは自己の本質に通じる第三の目のある場所だ。そこに至るとあらゆる超能力が顕れてくる。大自然、宇宙との融合ができ、調和すると全ての存在とひとつの波動で結ばれるようになってくる。つまり、ハーモニーを奏でるような共鳴の場が生まれる。そうなれば、自他の区別が消える。だから、何でも見えるし、聞こえるし、何にでもなれる。それにはまず、欲望を捨てて、欲しいという気持ちを捨て、無駄

な力を捨て、要らない雑念を捨て、邪気を捨てて宇宙に帰せば良い。そうすると力の元になっている自分の外側にある外気が自分の内側を循環する内気に変化してくる。ここまで来れば後は大自然と一体であるという意識を維持しているだけで、自ずから天人合一の状態が達成される。そう聞くと、かなり難しそうに思うだろうが、気功の修法は驚くほど簡単だ。簡単な動作の繰り返しだ。先ず、基本として^{せいしゆ}甩手、これは手を前後に振るだけのことだが、それから始める。手を振る時、身体にある邪気が指先から出て行くと想像する。これを3、40分やって、次に「^{たんとう}站樁法」というイメージングの修法を行う。そのうちの一番簡単な修法を説明する。先ず両足を少し広げて、やや膝を曲げ、姿勢を真っ直ぐにして、両手とお腹で大きなボールを抱えているようなポーズで立つ。このとき、そのボールを具体的なイメージにして、そのボールが吐く息に合わせて次第に大きくなり、自分の身体を覆い、吸う息に合わせてだんだん小さくなり、それが臍の下丹田に収まってゆくと想像する。それを毎日30分から1時間くらいやると、次第に外気が内気に変化してくる」
賢は立ち上がって数馬にそのポーズをして見せた。

「それだけで済むのか？もう少し詳しく教えてくれるとありがたいがな」

「分かった。七つのスートラと意念すべき内容はメールで送るよ。気功の修法はこれだけじゃ済まないけど、これが最初のステップだ。おまえに会ったときに少しずつ教えるよ」

「ありがとう・・・ところで梓さん、貴女は大企業の一線で最先端の技術に取り組んできたエリートだったのだから、こういう不可解な話に対して何か感想があるんじゃないですか？」

数馬は無言でいる梓を気遣うように言った。

「私にも、この人の話すことは理解できないことがあります。今まで学んできた知識に基づいて判断したのでは考えられないことを言いますから。でも、この人の言うことは全て本当のことなのです。現実それが実証されるので、わたしは自分の考え方を改めざるを得ません。今では私は唯、教えて頂いていると思って、この人の話を聞かせてもらっているのです」

「そうですか。まあ、貴女は賢の妻なのですから、それも当然でしょうね。じゃ、愛子さんはどう？愛子さんは失踪の経験があるのだから、意識の世界がどんな世界なのか分かるんじゃない？」

「わたし、分かんないよ。みんな賢パパや原さんに教えてもらって、「ああ、そうなっているんだ」って納得しちゃう」

その後4人は暫くの間歓談していたが、数馬が愛子と原に、数馬達の結婚式で踊ったダンスをもう一度見せてほしいと頼んだ。ふたりは最初照れていたが直ぐに承知した。愛子がCDプレーヤーを持って来てふたりでリビングの広い床の中央に行き踊り出した。そのリズムは周囲の雰囲気と調和していて、それを見ていた3人は心地よさに、自分も踊っているような気分になってきた。踊りが終わると、3人は感激して拍手をした。数馬が言った。

「素晴らしい、結婚式の時も見とれてしまったけど、今も観ているだけで気持ちが良くなって、自分も一緒に踊っているような気分になってきちゃった。これはやはり映画のシーンに気を取られて、涙を流すのと同じことかな？」

賢と梓が同時に首を横に振った。

「それは違うと思うよ。今のは同調だ。俺も原さんと愛子の踊りに同調した。意識して心の中で踊り出していた。映画のシーンに引きずり込まれて登場人物になったような気がするのと同化だ。自分を失ってしまっている。自分の意識が覚醒状態にあるか、否かで全く正反対の効果が生まれてくる。宇宙のリズムには同調するのが望ましい。その事で自分の本質に向かう道が開かれる。そして、宇宙の根元存在には自我を捨てて、同化できるのならそうなることが究極の達成になる。現象界で演じられている演劇やスポーツ、金や権力などの世界に同化してしまうことは、真実とは逆の方向に向けて突進していることになる」

「なるほど、だが難しいもんだな。微妙だ」

「まあ、自分を空しくして、全托することだと覚えておけば良いよ」
その晩、数馬は梓の部屋で休んだ。梓は賢の寝室で、賢と共にベッドに入った。賢は梓に心から感謝し、梓を静かに抱き寄せた。梓が賢の胸で

囁いた。

「あなた、今日のスーツラ、初めて聞きました。わたしがやっても大丈夫かしら」

「どうしたんだ。俺と一緒に生きているから、お互い同調しているだろう。いつも宇宙の根元には通じているだろう。スーツラなんて必要ないんじゃないか？」

「ううん、わたしもあなたと一緒にアフリカに行って、あなたのお手伝いをしたいのです。そのためには、あなたと同じような超能力を持たなくては……」

「梓、今度一緒に行こう。ふたりで泰山に行ったときのようにすれば、一緒に行けるから。君一人を残して行ってごめん。でもまあ、スーツラは自分の本質に附いて認識出来るようになるという点では、是非やってみた方が良いな」

「あなた、私たちを朝までこのまま腕の中に抱いていてくださいね」
翌朝、賢が目目を覚ますとやはり梓の姿は無かった。いつ起き出したのか全く気が付かなかったことに、賢は自省の気持ちが湧いてきた。

この日の会議は賢と数馬、原、それに東京のマトラー・システムから西川専務と弓張常務、諏訪プロジェクトに参加している3人のメンバーが加わり、梓が記録を取った。司会進行は諏訪プロジェクトのプロジェクト・リーダーに任命されている葛川が行った。始めに数馬が挨拶した。

「おはようございます。今日は早朝に参集して頂きありがとうございます。内観社長が漸く昨日から復帰できました。我々にとってもっとも喜ばしいことです。さて、今日の会議の目的は、現状の把握と認識の共有化、それから、プロジェクトの向かっている方向性に附いての再確認です。難しいプロジェクトですから、全方向に意識を向けて取り組む必要があります。では、葛川さん、田辺さん、よろしく申し上げます」

葛川は返事をして席を立つと全員に頭を下げて言った。

「それでは、早速会議に移らせて頂きます。先ず今日のアジェンダ（議事予定）を説明させて頂きます。初めに、諏訪プロジェクトの進捗状況報告、次に現時点に於ける問題点の報告と討議、それから、先ほど樋口

社長のおっしゃったプロジェクトの方向性の確認に附いての討議の順で進めてゆきたいと思います。それでは先ず、わたくしからプロジェクトの進捗状況報告をさせていただきます」

賢は梓の様子がおかしいことに気付いた。目が虚ろになっていて、手にしていたボールペンが指の間から滑り落ちそうになっている。誰もその事に気付いていないようだった。賢は右手を少し挙げて、葛川に合図した。葛川は話すのを中断した。全員が賢の挙動を見詰めていた。賢は席を立てて会議テーブルの端の席に着いている梓の横に行き、小声で言った。

「大丈夫か？」

梓からは応答が無い。

「どっ、どうしたのですか？」

葛川が声を掛けた。賢は少し頷いたが何も応えずに、梓の肩に手を掛けて少し語調を強めて言った。

「梓、しっかりしろ」

梓はとろんとした目を開けた。しかし意識が定まっていないようだ。

「どこか、具合が悪いのか？」

「あ、あなた・・・あ、社長・・・だ、大丈夫です。少し意識が無くなっていたようで・・・」

「疲れているんじゃないのか？社長室で休むと良い。後は俺が記録しておくから」

「すみません・・・」

「葛川さん、少し田辺を連れて退席します。僕が出席していると思って会議を続けてください」

皆、心配そうな顔をした。賢の言った言葉の真意は分からないようだった。賢は祐子、亜希子の遺体、に加えこの会議室にも意識を向け、梓を立ち上がらせて、抱きかかえるように会議室を出て廊下を歩いた。賢は梓の様子を窺いながら同時に会議内容をモニターした。梓は賢に抱きかかえられながら、か細い声で言った。

「あなた、済みません・・・わたしが・・・しっかりしていないから、

足を引っ張ってしまっ……」

「足など引っ張っていないよ。おれは梓の意識が戻ってくれて、本当に嬉しい。どこか痛いところでもあるのか？それともどこか苦しいのか……」

「いいえ、昨日眠れなかったの。あなたの腕の中で、あなたに教えて頂いたストラを続けていたら、意識が冴え渡って来て、自分が空中に浮いているような感覚になってきたの。とっても良い気持ちになって、本当にどこか知らない国の空の上を飛んでいるようだったわ。そしたらね、祐子さんの姿が見えたの。丁度ベッドに入るところだった。目が真っ赤だった。直感的に亜希子さんのことを思って悲しんでいることが分かったわ。わたしは祐子さんの居るホテルの部屋に入って、祐子さんと会ったのよ。祐子さんは別に驚きもしないようだった。テレポーテーションできるのかって聞かれたわ。私は微笑みを返して、「亜希子さんの遺体は無菌の棺に納められているから、大丈夫ですよ」と伝えたわ。それで、あなたがおっしゃっていたように、「今にきっと生き返るチャンスが巡ってくるから、気を落とさずにいてくださいね」って伝えたのよ。祐子さんはとても喜んでくれた。それから私は雪坂康子さんの所に行ってみたの。あの人はどうやら夜お酒を飲む癖が附いてしまったようで、私があの人のアパートの部屋に入ると、一応礼儀正しい言葉遣いをしては居たけど、私がどこからどうやって自分の部屋に入って来たのか、私が自分の事を監視しに来たんじゃないのか？と執拗に絡んできたわ。私は康子さんを何とかベッドに横たえて、彼女が眠りに落ちたときに部屋を出たのよ。どうやって出たのかも分からないけど、暫く空中に浮かんでいたら、今度は私たちの赤ちゃんが話し掛けてきているのが分かったのよ。それは不思議な感じだったわ……」

ふたりは社長室のあるオフィスに入った。賢が梓を抱えるようにして部屋に入って来たので、総務部長が駆け寄って来た。事務員達も一斉に立ち上がってふたりの方に視線を向けている。

「秘書室長はどうされたのですか？」

「少し疲れたようなので、私の部屋で休ませるから毛布を用意してくれ

ないか？」

「分かりました」

賢は社長室に入ると梓をソファーに寝かせた。総務課長が渡してよこした毛布を梓の身体に掛けながら、賢が言った。

「梓、身体が疲れているときはあまり意識を集中させてはだめだ。君はまだ、エネルギーの自己注入方法を知らないから、体力を極端に消耗してしまうことになる。両手を出してごらん」

そう言うと賢は梓の両手を自分の両手に取り、暫くの間天空のプラナを自分の百会から注入して、手を通して梓の身体に流し込んで丹田まで送り続けた。梓の意識が次第に明瞭になってきた。

「社長、済みませんでした。私、もう大丈夫です」

「いや、もう暫くこのままでいなさい。僕の意識が会議の内容は全て捉えているから、何も心配要らない」

「すみません」

賢は社長室を出て会議室に向かった。会議室に入ると葛川が言った。

「内観社長、秘書室長は大丈夫ですか？」

「うん、何とか大丈夫そうだ」

「それは良かったです。それでは内観社長が戻られたので、もう一度これまでの進捗について報告を……」

「いや、その必要は無い。会議の内容は全て把握しているから」

「でも内観社長、進捗に問題のある事項に附いては内観社長にもお聞き頂いた方がよろしいかと」

「その件もさっき君が説明していたから全部分かっている。文部事務次官から書簡による警告を受け取ったことと、諏訪市内で今度のプロジェクトに反対している地主と町長が衝突して怪我人が出た件だろう？」

「えっ？ どうしてご存じなのですか？ この場におられなかったのに」

「だって、さっき君が説明していたじゃないか。会議の内容は全部把握しているよ」

皆、賢の言葉にうろたえているようだった。数馬が言った。

「諸君、内観社長には透視や天耳の能力がある。内観社長はあらゆる場

所に偏在することのできる人なのだよ。心配しないで、会議を続けよう」
葛川が言った。

「それでは試行計画に附いて討議したいと思います。先ず樋口社長からコンセプトをご説明頂きたいと思ひます」

数馬はPCを用いてフォログラフィ・プレゼンテーションのツールを用いた説明を行った。数馬が操作をすると、会議室のテーブルの20センチほど上方、直径1メートルほどの空間に諏訪地方の立体映像が映し出された。

「この装置は、原研究所長が個人的に作成した立体映像プレゼンテーション・ツールです。現在の試行サイト全体のイメージを捉えることができます。技術的な話は省略しますが、物質転送機で天空にデジタル・ハイビジョン・ビデオの撮影装置を転送し、滞空させて現時点のサイトの様子を映しています。全員よく見てください。外周を囲む塀の工事は殆ど終わっています。しかしまだゲート部分が完成していないので、サイト全体に渡った試行は難しいと考えています。勿論物理的な問題だけでなく、先ほども説明があったように反対者が抵抗を続けているし、何件かのトラブルも発生しているので、特定地域に限定してトライしてみようと考えています。ここがその候補地です」

数馬がPCを操作すると、全域の映像がズームアップし、湖の近くの2、300軒ほどの家並みのある地域が映し出された。

「この地域は少し特異性を持った地域で、地域の住民の殆どが蕎麦作りに関係のある仕事をして生計を立てています。小売店は個人運営のコンビニとガソリンスタンド、それと小さなスーパーがあるだけです。試行としては少々物足りない気もしますが、経済の仕組みを変えるテストなので、最初はこの程度の地域で試してみるのが良いと考えています。内観社長ご意見をお願いします」

「これは、何ヶ月くらいやる計画ですか？」

「およそ3年を計画しています。試行期間以外に何か問題ありますか？」

「試行対象はそれで良いように思ひます。しかし、もう少しスピードを上げることはできませんか？」

「それは内観社長の方がよく分かっていると思いますが、今までの生き方を変えるわけですから、3年間でも短いと思うのです」

「確かに樋口さんの言うとおりでありますが、我々には十分な時間がありません。ですから・・・そう、このテスト試行から本試行への切り替えを3年後に一気に行うのではなく、運用に大きな支障が出ていないと判明したシステムから、順次本試行に移行していったらどうかと思いますけど」

「あまり時間を掛けてテストができないということは、何か急がなくてはならない理由があるのですか？」

「人心の2極化のスピードが速まっているように感じるのです。急がないと、虚実混交へのパラダイムシフトに対応できずに取り残される人が多発する可能性があるのです。それともう一つ、OVSとMTSの販売が急激に伸びるので、誤った使い方をさせないために、その利用環境のモデルを示す必要もあります」

「どういうことか説明してもらえますか？」

「OVSの出現で、人々はこの世界が、物質だけで構成されている世界ではないと謂うことを認識しつつあります。その認識が世間一般にまで広がると、人々の考え方が両極に別れてゆきます。ひとつは「命が永遠なら、何もこんな苦しい社会に我慢して生きていなくても、早くあの世に帰って楽をして生きた方が良い。この社会には肉体に起因する、病や外形的問題についての苦しみがあり、嫌いな人と一緒に生きていなくてはならない苦しみもあるし、自分が本当に望んでいるものや、実現したいことを手に入れることができず、本当に好きな人と別れなければならないという悲しい出来事も起きる、こういう苦しみが尽きることのないこんな社会から早く出て行きたい」 — そう考える人たちが今までより数段増えてきます。その一方で、死後の世界があり、永遠の命が保証されていることで、この上ない喜びを感じ、日々感謝の念に満ちて生きる人たちの数も増えてくると思います。その人達は自分の肉体が一時的に預けられたのだと謂うことを理解して、この肉体に感謝し、同時に、この肉体はいずれ死して、地に返るものである事を認識し、肉体に対す

る執着が薄れ、神経質なほどの健康志向に走ったり、肉体からくる美食や快楽を求めたりすることも無くなり、逆にどんなことにでも挑んでみようという捨て身の考え方をするようになってきます。この人達の向かっている方向は、好ましい方向だと思えます。初めに言った厭世的な方向に向いてしまう人たちの認識を早く切り替えてやる必要があるのです。そのために、テスト運用はできるだけ短期間に済ませたいのです。もう一つはMTSです。MTSについては現在国内の様々な所で、様々な議論が行われています。それは樋口社長が一番よく分かっています。何回も講演を依頼されたり、議論に引っ張り出されたりしていますからね。MTSはこの世界のインフラをことごとく変えてしまう可能性を内包しています。新しい経済システムが動き出す前に、そのプロトタイプを確立する必要があると思うのです。そうしないと、また我欲の強い輩が自分達に都合の良い経済システムの構築をゴリ押ししてくる危険性があるのです。論議はどうやら、国内だけに留まらないようです。MTSは国内にしか販売されていないのに、むしろ海外においての方が活発に議論されているかも知れません。このことについて樋口社長、どんな状況か説明してもらえますか？」

「それでは、最近活発な議論の渦中にある項目を説明してみましょう。ひとつは輸送システム、もう一つは移動システムです。この2つの分野はMTSの出現で全く異なった形態に変化することを余儀なくされています。運送を業としている会社では舵取りを間違えると、倒産に追い込まれることは必定です。この2つとは少し毛色の違うところで、医療分野、製造分野、野菜栽培、漁業などでもMTSの可能性について盛んに議論が交わされています。特に変わったところでは、バイオや細菌研究の分野、スポーツチケット販売や旅行代理店などサービス業でも検討が行われています。先日はあの日本でも有数の旅行社トラベリクス社に頼まれて、お土産宅配サービスに関する検討会で講演してきました」

原が挙手し、質問を行った。

「樋口社長、バイオと細菌研究ではどういう議論が為されているのでしょうか？」

「原所長はご承知のことですが、微細領域に於ける空間移動はまだM T Sでは提供していない機能ですが、それを使って遺伝子組み換えや、分子構造の変更ができるかどうか調査を始めているようです。現有の設備では大変な時間と手間が掛かるけれど、M T Sを使えば分子の置き換えや遺伝子の構成の変更が簡単にできるのではないかと考えているようです」

「現時点ではそれは無理です。単に機能を押さえていると謂うことではないのです。微細領域では空間の概念が変わってきます。空間自体が直接人間の意識の影響を受けますから、簡単に空間をスワップさせることは出来ないのです。この手の議論にはあまり積極的に参加しない方が良いでしょう」と思います」

「ええ、それは承知しています。研究分野だけでなく、そのほか微細なものを扱う領域と巨大なものに関する領域、それと生物に関しては、M T Sの範疇外だというスタンスは崩していません。」

「それは良かったです。それともう一つ医療分野ですが、現在どのような検討が為されているのでしょうか？山岡医療研究所と国立免疫療法研究所にM T Sが納入されていますが、そこを中心にした議論でしょうか？」

「はい、あくまで臨床での利用を検討しているようです。先日山岡医療研究所が主催した「外科手術へのM T S活用」というワークショップで基調講演を行いました。私はM T Sを人間の生体に作用させることはできないことを強調しました。しかし医学者達には、それが何故できないのかがはっきり認識できないようでした。例えば「膀胱結石や腎臓結石の結石摘出に利用できないか」とか、尿管狭窄や閉塞の患者にカテーテルを挿入する様な場合にそれが可能かどうかなどという議論がありました。どうやら空間の移動という概念が今ひとつ理解できていないようです。一方で、M T Sを使った胃や腸の内視鏡の設置とカメラ制御についての研究論文も発表されていて、その分野に対しては出席者の多くが非常に興味を覚えているようでした。高齢者の胃がん患者の内視鏡挿入は殆ど不可能に近い場合がありますが、そんな場合でも検査する日に患者

に食事制限をさせるだけで、胃の内部状態が把握できるようになります。また、とても面白い発表で、血栓の除去に関する報告がありました。それはM T Sで血栓の出来ている部位に照準を定めて、その部分の血液凝固物を少しずつ取り除いてゆくというものです。血栓はそれ自体が生体からは独立しているので、少しずつ取り除くことで、血流を元に戻すことができ、瀕死の状態にある人を緊急手術を施さずに救済できる可能性があるという発表でした。ただそのためには現在の位置情報検出装置の精度では不十分で、手術台上の患者の体内臓器、消化器、血管、神経とその内部までの位置情報を正確に把握できるような位置情報検出装置を開発することと、M T Sの扱える空間の範囲をかなり微細部分にまで拡張する必要があります。質疑応答の中で、癌の摘出にM T Sを使用できないかという質問を受けました。わたしは、癌が生体の一部であるので不可能だと回答しておきましたが、出席者の中には、まだ不可能と決めつけるのは時期尚早と思っている人もいたようでした。その中の一人から、「造血細胞が血中に遊出して腫瘍化し、白血病細胞と化した様な場合はその癌細胞をM T Sで自動的に体外に摘出する方法も確立できる筈だ」と謂うような説明をしている循環器系疾患医師の発言もありました。こういう話を聞いていると臨床医学の改善に取り組んでいる人たちの真剣さが伝わってきて、私自身も何とかM T Sの扱える空間の精度を高めることができないものかという気がしてきました」

数馬の話聞いていた原が言った。

「樋口社長、今度私をその研究所の循環器系の研究をしている研究者に紹介してもらえませんか？M T Sの精度を上げることはできるのですが、どのような種類の機能の拡張と精度向上とが必要なのか、臨床研究に携わっている人の生の意見を聞いてみたいのです」

「研究所長自らが意見収集に出向いて頂けるのであれば、私はいつでもお連れ致します。早速先方の都合を打診してみます」

賢は一瞬、原が一般の社会に出て行くことに安全面での懸念を覚えたが、そのことは口にしなかった。

それからは試行計画のタイムスケジュールと人員計画について討議が行

われた。翌週ゲートの工事が完了した段階で、およそ325人の人員を常駐させて試行をスタートさせることになった。

諏訪

試行スタートの当日は薄曇りで寒々しかった。内観システムズとマトラー・システムのメンバーは前日から諏訪湖御身渡ホテルに宿泊していた。賢は梓の身体を気遣い、セレモニーに出席することを控えたらどうかと言ったが、梓は絶対出席したいと言って引かなかった。賢はここまで漕ぎ着けることができたのは梓のコミュニケーション力に負うところが大きいことを考えると、梓の希望を受け入れざるを得なかった。セレモニーはゲートの外で1200人ほどの出席者の元、執り行われた。初めに賢が、続いて来栖谷^{きすみや}町長が挨拶を行った。テスト試行地域はプロジェクトのゲートに入って直ぐの所にある中郷町字末宮地域で、その住民は殆ど出席した。賢と町長の挨拶に続いて、マトラー・システムのプロジェクト・リーダー葛川が運用についての解説を行った。

「それでは実際の運用方法について説明致します。このたびの試験運用を行う地域はプロジェクトの対象となっている中郷町の内、末宮地域だけです。中郷町全体には外の地域との間に外壁を設けていますが、末宮地区は中郷町内の他の区域との間に簡易な柵を設けただけです。末宮地区への出入り口は2カ所としてあります。万が一災害が起きた場合は、柵は容易に取り除けるようにしてあります。もし故意に破壊しようとするれば、簡単に壊すことのできる柵です。唯この地域でテスト試行が行われているということを明確にする程度の意味しか持ちません。実際の運用については既に回覧板や説明会で詳細の説明をさせて頂いておりますが、まだ良く理解できない方もおられると思いますので、試行開始後の生活方法について簡単に説明致します。先ず大前提は、この地域の人た

ちは全体で1つ、みんなが家族だということを念頭に置いて頂くことです。そうすれば、これからの生活は本当に簡単です。これからは何か欲しいものを手に入れるのに、お金は一切必要ありません。既に皆さんにお配りしてあります i d トークンをお見せ頂くだけで、何でも好きなものを購入できます。その代わりと言っては何ですが、皆様方には今まで通り働いて頂きますが、その収入はまったく無くなります。ということになると、いろいろ心配になることがあるかも知れません。例えば、電気料はどうなるのか、テレビの受信料はどうなるのか、税金はどうなるのか、将来の年金の掛け金や、今受け取っている年金の支払いはどうなるのか、医療費はどうなるのかといった諸々のことが気になることでしょう。これまでお金に基づいた経済の仕組みの中で生きてこられたのですから、疑問に思われて当然だと思います。でも、お金のことは一切忘れてください。お金がこの世の中から無くなったと思って生活してください。例えばコンビニに行って、おにぎりとお茶を買うときは唯 i d トークンを見せるだけで良いのです。電気、ガス、水道、受信料、新聞代、税金などの請求は一切ありません。でも1つだけ気を付けて頂きたいことがあります。それは、過剰な要求をしないということです。パンを買う時に3個あれば十分なのに10個も20個も買おうとすると、その理由が必要になります。みんなでキャンプに行く為とか明言する必要があります・・・ここでは、個人情報などという考えは成り立ちません。当面少し不便に感じるかも知れませんが、この仕組みに馴れれば、こんな自由な生活はないと感じるようになる筈です。もうひとつ、ものを購入する場合がありますが、この町内で手に入らない物、例えばテレビを購入しようとする場合は調整事務所に相談してください。妥当と思えば、i d トークンで購入できます。これまであなたがテレビを購入できるだけの経済的な余裕がなかったとしても、あなたの要求が妥当であれば、調整事務所はテレビの購入を認めます。勿論配達等の手続はご自身で地域外の電気店との間で交わして頂きます。あなたは唯テレビの据え付けを見守るだけで、一切の支払いは不要です。全てこのように無料の世界です。この試行サイトの中にはコンビニとミニスーパー、内科医、ガソリン

ランド、それに蕎麦の販売店しかありませんが、それ以外のものに関しては、調整事務所に来て、事務所のコーポレートカードというクレジットカードを利用して購入してください。その時に購入品の妥当性を確認させていただきます。分からないことも一杯あるでしょうが、兎に角、あなたが誰であるかが分かればこの地域ではこれまでと同じように生活してゆけます。何か質問はありますか？」

5人が手を上げた。葛川は30歳代半ばに見える女性を指名した。

「あの一、私は末宮の菊貝です。これまでは働いたお金を貯めて、海外旅行をしてきました。殆どツアーですが、これからも海外ツアーには行けるのでしょうか？」

「勿論です。調整事務所にお問い合わせください。あなたの勤労と嗜好・・・好みですが・・・それらを考慮して、あなたと相談して決めることになると思います」

「ありがとうございました。私、それだけが生き甲斐ですから・・・」次に70歳を超えているように見える男性が指名された。

「儂は、もうこの先、長げえことはねえと思うじゃが、これまで貯めてきた儂の金はどうなるべ？」

「あなたのお金はそのまま手を付けずに現在の利回りで金融機関に長期貯金した状態にします。勿論あなたの名義です。しかし、そのお金は引き出さないで頂きます。また、その必要もありません」

「儂は得するような気がすんが、若げえもんらが困るべ」

「ご心配は無用です。今まで働いていた人たちはそのまま、働き続けて頂き、もうこれ以上働きたくないと思ったとき、あるいは、身体が言うことを聞かなくなってしまったときに、働くのを辞めればいいのです」

「そんな、うめえ話なんかい？でえじょうぶずらか？」

「はい、大丈夫です。皆様が一体感を失わなければ、問題ありません」次に質問に立ったのは40歳代半ばの働き盛りに見える男性だった。

「自分は、試行サイトの外で働いている鶴川と云いますが、今までの話を聞いていると、どうやっても収支が合わないと思います。直ぐに赤字になって試行自体が頓挫するんじゃないですか？」

この質問に対しては数馬が右手を少し挙げてから対応した。

「現在の経済システムの中での試行ですから、勿論多少の無理はあります。ですから、もし、皆様が「自分だけ得をすれば、他の人はどうなってもいい」とお考えになってしまうと、このプロジェクトはうまく行きません。まだ新しい仕組みを運用できるだけの基盤ができていないからです。殆どの仕組みは現在の経済システムの中で動いている仕組みをそのまま使うしかないので。そのとき、運用面でロスが発生することは明白です。当初は当社と内観システムズ、そしてNGO組織、支援者などの基金を運用して実施してゆくことになります。先ほど海外ツアーの質問が出ましたが、現在の経済システムの中で、自分がどれほど働いたら海外旅行に行けるかを考える必要があるということなのです。それは大会社に入って、給与の支給を受けているということを前提として考えるのではなく、例えば自分がお蕎麦の工場で働いているとした場合、自分の仕事がどれほど人のためになっているかを推し量ってみて、その結果海外旅行に行くのは妥当かどうかを自分自身で判断するということなのです。基本的には行きたいところに行けます。あくまで、自己裁量なのです。もし、あまり働かないで遊びを重点にしたければそれも結構ですが、その分他の人が苦勞することになります。みんな一体ですから、自分の行為が全ての人に影響するというを常に認識している必要があるのです。先ほど申し上げた企業と支援者が皆様の生活を護りますので損益のことは考えなくて結構です。損益という考え方を無くすこともこのプロジェクトの目的としていることなのです」

男性はまだすっきりしないようだったが、軽く2回頷いた。湖からの風が少し強くなり、身体がしんと冷えてきた。太陽は姿を現さない。次の質問者は55歳前後の主婦だった。まだ3、4歳にしかならない女の子の手を引いている。子供の身体を右手で抱き寄せながら言った。

「安村と申します。私の心配は通院です。それと地震や火事などの緊急時の対応です。どう考えたら良いのでしょうか。特に、子供が発熱したときなど、車で病院に駆けつける前に、調整事務所に寄らなくてはならないのでしょうか？」

「既に回覧などで説明している内容ですが、いちいち調整事務所を通す必要はありません。既に近隣の各病院に対して、i dトークンの運用に関する連絡を入れて承認を取ってありますし、皆様のお持ちの健康保険、国民保険の証書を全て調整事務所ですべて預からせて頂いておりますので、i dトークンを持参して直行して頂ければ結構です。それから、緊急時の件ですが、皆様の電話回線や携帯電話回線の発信番号が110番、119番そしてその他の緊急連絡番号に符合した場合は、調整事務所もそれをキャッチします。救急車、消防車の出動はこれまでの通りとお考え頂いて結構です。もし急を要する事態が発生した場合、調整事務所も同時にそのことを把握していると考えてください」

主婦は安心したようだった。最後の質問者は40歳前後のネクタイを締めて背広を着た、ビジネスマン風の男性だった。

「私は、諏訪市役所に勤めている園田と申します。今まで何度となくお話を伺い、今回も質疑応答を伺いましたが、私にはまだこのプロジェクトの意図しているところがしっくり来ません。大変失礼な言い方かも知れませんが、何となく胡散臭く感じて、最終的に何か宗教団体の様な組織に加入させるような意図があるのではないかと思えて仕方ないのですが、そのような懸念は無用なのでしょうか？それと、今回のプロジェクトは国や県の行政とどう関係するのでしょうか？その辺をご説明頂きたいと思います」

「この件につきましては、既に説明会や回覧板で何度となくご説明申し上げているとおりでありまして、あくまで、このプロジェクトの目的とするところは人々の物質偏重の意識を、精神性をも大切に考える意識に変化させることなのです。宗教やその他の組織の活動とは全く関係ありません。精神性の改革については、現在の物質社会に最も強く影響を与えている、「何でも損得で考える拝金志向的な経済システム」を根本から変える必要があるため、このプロジェクトでは新しい経済システムを試行してみることにしたのです。そして、この地域の人々にはこれまで以上に一体感を持って生活して頂き、その結果、この地域に住む人々の人生に対する捉え方がどれだけ変化するかを確認することが目的です。

その実現のためにはこれまでに様々な障害を乗り越える必要がありましたし、これからも予測できない矛盾や障害が起きてくることは目に見えています。それらの問題点を解決できるかどうかは将来の理想的な社会のあり方を決めることになるものと確信しております。園田様、あなただけでなく殆どの方が、まだこのプロジェクトに確信をお持ち頂けていないと思います。しかし、我々は、企業として、NGOとして得られた財源を投入してでも、このプロジェクトを成功させ、次の時代の先駆けにするつもりです。勿論国や県の許可も得てあります。但し、ここは独立自治区としての運用ではなく、1つのテーマパークのような形態で運用することにしました。園田様よろしいですか？」

「ありがとうございました。私も公務員の端くれとして、現在の社会のあり方を改めようとするこのプロジェクトには興味を持っています。また同時に中郷町の住民として、このプロジェクトには協調してゆきたいと思います」

ここで質疑は打ち切られ、賢と数馬、NGOの代表、町長の4人によるテープカットが行われた。それから初めてゲートがオープンし、各人がi dトークンを改札機に翳しながらゲートを通り抜けて自分の家に、あるいは職場に向かった。自家用車で来たものはETC機能を搭載したi dカードを車のカードリーダーにセットして、自動車専用ゲートを通して行った。賢はセレモニーが無事終了したことに胸を撫で下ろした。その時賢の意識の中で梓が腹部の苦しみを覚えていることが分かった。賢はセレモニーの間中ずっと関係者と一緒に立っていた梓の元に急いで駆け附けた。

「梓、どうした、大丈夫か？」

「あなた・・・す、済みません。お、お腹が痛くなってきて・・・」

「冷えてきたからな」

賢は梓の胎内をスキャンし、腹痛の原因となった邪気を探した。肺と腎臓に寒気が入り込んでいて、肺の寒気が大腸にまで降りて来ているのが分かった。賢は先ず梓の檀中に左手を当て寒気を抜き出し、次にその手を腎臓部分に移して蓄積した邪気を自分の手を通して瀉出した。それか

ら梓の腹部に両手を翳すように当てて瞑目した。大気中のプラナが百会を通して流入してきて、賢の両手を通して梓の腹部に注入された。賢は自分と梓の体の間でプラナを循環させた。梓の身体にエネルギーが充満してくると、賢の掌に嬰兒の動きが感じられた。

「梓、動いたぞ」

「あなた、身体がとっても温かくなってきて、痛みが無くなりました。さっきは、赤ちゃんが固くなったように感じて戦慄を覚えたの」

「そうか、もう大丈夫だ。さあ、梓、あの人影の無い所に行って、ホテルに移動しよう」

賢は梓を抱きかかえるようにして木陰に行き、人に見られていないことを確かめてから梓を抱き締めて一気にホテルの部屋にテレポーテーションした。梓は賢に抱き締められて嬉しかった。お腹の子供も喜んでるように感じた。ホテルの部屋に出現すると、賢は暫しの間、梓をそっと抱いたままその場に立って、静かに背中を撫でていた。梓は心地よさそうにじっとしていた。やがて、賢は梓にベッドに入るように言った。部屋には暖房が効いていた。梓は上着を脱いで、ベッドに潜り込んだ。それを見届けると、賢はまたテレポーテーションしてテスト試行サイトの会場に戻った。

テスト試行の滑り出しは順調だった。住民は初めの内買い物でレジに並ぶと、つい財布を探してしまった。しかしそれも2、3日の間だけで、すぐにidトークンの使い方にも慣れてきた。必要以上に購入しないように執拗なまで指導を行った成果もあって、極端な買い物をする者もいなかった。まごついたのはむしろ裏方の調整事務所のメンバーだった。導入されたidトークンのシステムはクレジットカードの一括精算に似た処理を行う会計システムで、末宮に於ける個人別清算を現在の経済システムに変換する処理に迫られた。マトラー・システムとNGOの担当者は末宮に貼付いて業務を行った。1週間もすると住民の生活様式も従来の形と何ら変わらなくなり、特に新しいテスト試行を行っているといった感覚は無くなった。しかし、9日目になって変化が起きた。老人会

のメンバーのうちの一人在外食に出掛けようと町内の老人たちに話を持ち掛けたのだ。高齢化した隣組の中でもとびっきり元気のよい片山平蔵という75歳の男性が「みんなでほうとうを食べに行かないか」と言い出した。それが彼らにとっての実質的なトライアルになった。老人達は「どうせただなんだから、山梨の勝沼まで足を延ばして1泊しよう」と言い出したのだ。片山平蔵が早速、調整事務所に申請に来た。係りの胸倉という男性は旅行に出掛ける老人たちのidトークンを確認してから、勝沼のホテルに予約を入れ、平蔵爺さんにコーポレートカードを渡した。

「ホテルや店、レストランでも清算はすべてクレジットカードで処理してください」

平蔵爺さんはIT関連のことに詳しく、仲間の信頼も厚かったので、責任者として清算に関するすべての処理を任された。皆それぞれidトークンをポケットに仕舞い込むと、すっかり安心してしまっ、それ以外には宿泊に必要な着替えや洗面道具などを用意しただけだった。翌朝9時に老人たちは72歳の堀田啓次郎の運転する1200ccのフィックスと74歳の高村六朗が運転する1000ccのベッキーの2台の乗用車に分乗して勝沼に向けて出発した。堀田が「自分が先導役を引き受ける」と言った。堀田のフィックスには最新のカーナビが附いていたからだ。勝沼に行く途中で飛塚義治という物知りで通っている老人が昇仙峡を見物してゆこうと言い出した。反対を唱えるものなど居よう筈もなく、彼らは昇仙峡に寄ってそこで昼食を摂ることになった。11時半を少し回ったころ溪谷を流れる荒川に掛かる橋を渡り、土産物店が立ち並ぶ昇仙峡の入り口に着いた。そこで道は山中を通る大通りと溪谷の川に沿った狭い道に分かれる。飛塚の提案で川沿いの昇仙峡ラインを、景色を楽しみながらドライブすることになった。本人の希望もあって先行した堀田だったが、運転にはかなり神経を使っている様子が誰の目にもはっきり分かった。車がやっと1台通れるほどの道で対向車とすれ違う時は、全員が右や左を覗いて大騒ぎをした。猿岩を超えた辺りで前方から若い男の運転するスポーツカーが爆音を発しながら疾走してきた。堀田が言っ

た。

「ローズ・エリザだ。すげえ車が来たぞ。まずいな」

「ぎりぎりに避けろ、左はもう少し寄せられる」

助手席の平蔵爺さんがサイド・ウインドウから外を覗き込んで言った。堀田は左側の淵ぎりぎりまで避け^よけたが、エリザはそんなことには頓着せずどんどん前に進んで来て、無理に行き交わそうとした。しかし道の山沿いには巨岩が突き出していて、エリザはそれ以上直進できなくなってしまった。その上、車と車の間が5センチもないほど接近してしまい、動きが取れなくなった。エリザの助手席には、ピンクのコスチュームをまとったまだ20歳にもならない若い女性が乗っている。男は女性の方に目を向けてにやっと笑ってから窓を開けて怒鳴った。

「おい、爺さん、バックしろよ」

堀田も負けていなかった。

「俺はぎりぎり避けてるすら、おめえが突っ込んできたじゃんか。おめえがバックしろ」

「おお、そうかよ。じじいじゃバックは無理か。へへへ、こっちでバックしてやろうじゃねえの」

男はバックギアに切り替えてアクセルをふかした。エリザは爆音を発していきなり後退し、ボディの左側で突き出ている岩を擦りそうになり、それをよけようとしてハンドルを切った時に、右ボディでフィックスの側面を擦った。エリザの男は車を後方まで動かして止めると、いきり立って降りて来た。

「おい、じじい、擦ったじゃねえか！えっ、どうしてくれるってんだよ。このわっぱはだちのわっぱだ。弁償してもらおうじゃねえか」

堀田も黙っていなかった。車から降りると男に向って言った。

「そんなことあらずか！俺は止まってたじゃんか、てめえが擦ったんじゃねえか、おめえこそ、俺の車を弁償しろ。どうしてくれるすら？」

老人たちが車からぞろぞろ降りて来た。男と若い女は、額に皺を寄せて睨み付けている老人達に囲まれてたじろいた。高齢とは謂え、8人の男達の怒りは2人の若者を怯ませるのに十分過ぎる。若い女は男の後ろに

隠れた。

「じ、爺さん・・・たち、俺は悪くねえぞ。爺さんがバックしろって言ったからしたんじゃねえか・・・このわっぱは俺んじゃねえ。無理言って借りてきたんだ。爺さん・・・車の保険に入ってるだろうな？」

平蔵爺さんが言った。

「おめえなあ、年長者にてえする敬意っちゅうもんはねえのか？さっきからだまってるや、勝手なこんぼっか言いやがって」

「そりゃ、おれだって、爺さんがあやまりゃ、文句は言わねえよ」

堀田が、吐き出すように言った。

「まあ、おめえたあ言い合ってもしょうがねえな。おたげえ相手の車を治すことにすべえ。そんなら、おめえの負担もねえずら」

「オッケー。じゃあ、お互い保険屋に携帯して、奴らに後始末してもらおうぜ」

男は小娘を連れて木陰に行くと、スマホで保険会社に連絡を入れた。男は長い間保険会社と話をしていて。堀田も調整事務所に連絡を入れ、状況を説明した。しかし、乗用車に対物車両保険が付保されていないことを伝えると。事務所の係りは何としてでも、全面的に相手に支払ってもらうように堀田に伝えた。堀田が携帯電話での話を終えて戻って来た男にそのことを話すと、男は

「修理代払わねえと言うんじゃ、慰謝料として、代わりに何かもらうしかねえな、なあ、ミナコ」

と小娘の方を見て言った。小娘は頷いた。平蔵爺さんがふと思いついたように i d トークンを取り出して言った。

「おめえ、内の町内に寄ってけ、このキーで好きなものを買ってやらあ」と言った。男はにやっと笑うと。フィックスの修理代の請求先を書いたメモを渡しなが、堀田に末宮の調整事務所の場所を確認した。高村六郎が平蔵の耳元で言った。

「まずいんじゃねえのか？調整事務所に連絡した方がいいべ」

「でえじょうぶだ。事務所の連中が i d トークンで何でも買えるって説明してたべ」

それが一つ目のトラブルだった。それから一行は昇仙峡ラインをそのまま走り続けた。昇仙峡の岩肌は切り立っていて、荒々しい姿が周囲の赤松の樹影と調和し、庭園の様な雰囲気を作り出している。昔、馬車乗り場のあった辺りまで行くと道の分岐点があり、大通りとそのまま川沿いを走る道に分かれたが、堀田は川沿いの道を選んだ。途中まで進むと土産物店があった。店番と思われる男が道路の中央に立ち、両手を挙げて行く手を遮った。

「この先は行き止まりだから、ここに車を置いていった方が良いでしょう」しかし、まだ奥まで行けそうな雰囲気だ。堀田は何か言っている男を無視して強行した。少し行くと左手に何店かの古びた店が建っているところを通り過ぎ、更に奥に進むと道の両側に活気を感じる小綺麗な小さな店が建ち並ぶ所に出て、それ以上進めなくなった。堀田と高村は突き当たりの店の駐車場に車を停めた。12時半を回っていた。平蔵爺さんの提案で、その店で昼食にすることになった。壁の張り紙にほうとうと書いてある。

5人がほうとう、3人が山菜蕎麦を頼んだ。露天のテーブルからは溪谷を望める。白い大きな岩が点在した荒川は、生き物のように激しいしぶきをあげ、見事な溪流を造っている。昇仙峡の景色を眺めながら、8人は今晚の宴会の話題に花を咲かせ食事を楽しんだ。食事が済むと平蔵が精算のために席を立てレジの所に行った。

「全部で8400円になります」

「うまかった。ありがとよ。で、このカードで精算できるずらか？」

店の主は首を横に振って言った。

「済みません、ここはクレジットカードが使えないんですよ。現金でお願いします」

「おれっちはこのカードしか持ってねえよ。そんじゃしかたねえから、これを使うべえ」

平蔵はidトークンを取り出した。

「お客さん、冗談言わないでくださいよ。そんな得体の知れない鍵みたいなもの、家じゃ扱えませぬよ」

「いや、お宅は知らねえかも知らねーが、こいつは何でもただで買える i d トークンって凄いやつぞ。うちの村じゃなかなか重宝しているだべ」

「愛デート君なんて、ふざけないでくださいよ」

店主は誤解して怒りを露わにし始めた。

「どうしてくれるんですか？」

「そんねにいじやいてこまったな。ほいじゃ、i d トークンも使えねえんだら、調整事務所に連絡するっきゃねえべ、係の男と話してくんな」
店主は平蔵の渡してよこした携帯で調整事務所の担当と交渉し、料金を送金してもらうことで、何とか了解した。

「まあ、やぶせったいなあ。やっぱ金持ってくりゃ良かったべ」

店を出ると堀田がみんなに向かって言った。平蔵がみんなを諭した。

「なな、するな。俺たちは試行中ずら。金は使っちゃだめだべ。町長も言ってたべ、今の金の世の中がおかしいずら。むかしやあ、金なんかなくても助け合って生きていけたんがね。金っちゅうもんが物やサービスの有りがたみみてえもんまで消して、みんな人や物に感謝するっちゅう心せえなくしちまっただ」

これが2つ目に起きた問題だった。外でのコーポレートカードの使用も万全ではない。一行は奥にある仙娥滝に向けて遊歩道を歩いた。左手に高く聳える円覚峰の巨大な仙人のような白い岩肌が見える。先ほどの店の壁に貼ったポスターに昇仙峡を代表する石峰だと書かれていた。老人達はその美しさと迫力に圧倒されてしまった。仙娥滝に辿り着くと、何人かの観光客が大きな裂け目のある巖を背に写真を撮っていた。老人達はがやがやと話しながら細い道に戻った。途中で息が切れて何度も休憩を取った。やっとの事で車にたどり着くと馬車乗り場まで戻り、そこからは大通りに出て昇仙峡ラインを更に登った。やがて橋を通過し、賑やかな町に入った。堀田と高村は水晶博物館の隣にあるケーブルカーステーションの前に車を停めた。次の障害は自動販売機だった。さっきのほうとうと蕎麦の味が濃かった為なのだろうか？老人達は喉の渇きを訴えた。誰もコインを持っていない。一行は仕方なく、近くの手洗い所で水

道の水を飲んだ。現金が無いことにはどうしようもないということになり、クレジットカードで現金を引き出そうと云うことになった。しかし、現金の引き出し方を知っている者はいなかった。通りの向かいにある郵便局の受付に聞いて、ATMのある場所を教えてもらったが、誰もコーポレートカードの暗証番号を知らなかった。平蔵は調整事務所に電話した。しかし事務所の係は「キャッシュは引き出せません」と言った。一行は諦めて、今度はケーブルカーに乗ることにした。チケット売り場でもクレジットカードの支払いで一悶着あった。

「ただよりたけえものはねえな」

後藤幸夫が言った。

「そんなことはねーだ。金のことを忘れて生きるためにゃ、金がどんなにおれっちに染みこんじまってるか、分かんなくちゃなんねえんだ。町長っちが、本当は金なんて無くても生きてゆけるっちゅうことを教えてくれただ。俺は生まれたときからずっと金のことばっか考えて生きてきたけど、つまんねえこった。生まれる前と、死んだ後にゃ、金なんてありやしねえ。もうじきほんとに要らなくなるだべ」

8人はケーブルカーでパノラマ台まで登り、山頂にある八雲神社に参拝してから富士見台に向かった。雲が晴れてきていた。霞む南西遠方に南アルプスの山々が連なり、少し離れた南東の彼方の雲上に富士山が浮かんでいる。久しぶりの富士の姿に老人達は無邪気に喜んだ。

「こんな景色は、外国にもあるんだべか？おれは生きてて良かっただべ」
今まであまり話さなかった78歳になる灘節^{あきら}聡が言った。

「富士山はいつまでも変わらねえな。それに比べて、おれっちはずいぶん変わっちまっただ」

佐賀井洋一が息を弾ませながら言った。

「おめえ、今回のidトークンのことどう思うだべ？」

灘節が佐賀井に向かって訊いた。

「どうって、そりゃ、ただで何でも手に入るっちゅうから、ありがてえこっちゃ」

「おめえな、俺っちは長げえ間生きてきたから、わかるべ。俺っちがた

だで何かをもらうちゅうこんは、誰かがそれをくれるちゅうこんだべ。どこかで誰かが俺っちのために働いているちゅうこんだね」

「そりゃそうだ。内観システムズとかが金出してきてるんだべ・・・」

「今までは、自分で働いて、金稼いで、そんで金もらって、その金で何か買っただべ。働きもしねえで、ただで何かをもらうちゅうんはなんか気持ちわりいもんだな」

「だけんどよ、おめえ、考ええてみろ、おれっちはいままで生きてきたけど、何も食わなかったって、水せえ飲んでりゃ、1週間やそこらは生きていられるだべ。そん水だってよ、みんなただだべ。そんことじてえが、なんか不思議な感じだべ。こん歳食らうまで気がつかねえんじやな」

「うん、確かにそうだべ、水はただだけんど、誰もくれるちゅうわけじゃねえ。地面から湧いてくるからな。地面の水は、雨が降って地下に浸みこんだもんだべ。んなら、誰のもんでもねえ。ちゅうか、みんなのもんだべ」

「もしかすると、俺っちって、黙ってても生きれるようにできてんじやねえのか？だってよ、身体悪くなりゃ、誰かが助けてくれるだべ、水だけ飲んで生きてりゃ、栄養失調で倒れるだべ。だけんど、誰かが食いもんをくれて助けてくれるべ。ありがてえなあ」

「おめえ、そりゃ、俺っちみてえに、みんな助け合って生きているからだべ。一人で生きてりゃ、水だけ飲んで生きてたって、途中で栄養失調でのたれ死んじまうだべ」

そこに平蔵がやって来た。

「何話してるだべ？」

佐賀井が応えた。

「i dトークンはありがてえって話したが。平蔵、おめえどうして町長がこんただこと考ええたかわかるだべか？」

平蔵が言った。

「おれっちが金んこんばかり考ええてるから、そんなこと忘れろってこ

とだべ。そんでもってもっと頭使えってことだべ。町長はみんなが物のことばっか考げえてる社会はだめだって言ってただ」

灘節が言った。

「頭使えっちゅうのとは違うだべ。あん人っちは「もっと周りのことをよく見て、意識して生きろ」って、言ってたべ」

老人達はそれぞれに景色を堪能した。30分ほどしてロープウェイを降りると、一行は宿に向かった。宿は塩山の山間やまあいにあった。

「ようこそいらっしやいました。おつかれでしょう。直ぐにお風呂にお入りになれますよ」

ホテルのエントランスを入ると女将が出迎えてくれた。一行は平蔵がチェックインを済ますのを待った。コーポレートカードが役に立った。4人部屋2部屋が予約されていて、平蔵がキーを持って来ると、直ぐに仲居が部屋に案内してくれた。阿形伝蔵が言った。

「なんか、ありがてえな。何でもただでいいんだべか？」

平蔵が頷いた。

「そりゃ、いいんだべ」

伝蔵は微笑みを浮かべて言った。

「儂は、けえったら、みんなのためになんかすることにするべ」

「伝蔵、まあ、そんなことはけえってから考えべえ。金なしでみんなに何してやれるかっちゅうこんだな」

平蔵が相槌を打った。

その晩の宴会は20畳ほどの広間で執り行われた。初めに平蔵が全員にビールのグラスを手にするように促し、乾杯の音頭をとった。

「みんな、お疲れさんでした。調整事務所が儂らの希望を聞いてくれて、こんな旅行をすることができたっつうことは、大変ありがてえことです。今度の旅行じゃ全く金は掛かりません。全部調整事務所が支払ってくれっちゅうことです。そんでもって、それに対して、なんの義務もねえ。これで良いのかなあと思ってるもんもいると思うけど、そんなことは忘れて、今日はひとつ思い切り羽を伸ばしてやっってください。そんじゃ、今日の旅行を与えてくれた皆さんに感謝して、乾杯！」

「乾杯！」

皆、何となくしっくり来ないようだった。

「なんの条件もなく、何でも自分の望み通りになる……こんなことがあって良いものだろうか？これは天国みたいなもんじゃないか？」
山下寛之助が言った。六郎が応える。

「大昔、金みてえなものがねえときゃ、こういう気持ちだったのかな？
なんか、ありがてえけど、やぶせたいもんがなくてすっきりしたっておもわねえべえか？」

後藤幸夫が言った。

「儂は、さっきからどうもしっくり来ねえと思っとったが、そりゃ、やぶせたいもんが何もなくなって、すっきりしすぎてるってこんだら」
次第に酔いが廻り場が華やいできた。飛塚が拍手を2回して、全員の注意を引いてから言った。

「俺はな、今回の i d トークンの話があってから、ずーっと、野菊の墓のことを思い出していたんだ。今日は、俺の胸の中にある思い出を聞いてもれえてえんだが、いいだべか？」

灘節が言った。

「野菊の墓ってえのは映画になった、あん伊藤左千夫の小説だべ？」

「そうだ。こんな宴会の時しんみりさせちゃわりいが、俺は呑むと、胸が苦しくなるんだ。俺にも昔、そんなことがあったからな」

平蔵が言った。

「今日は無礼講だべ。何でも話してくれ、なあみんな、聞いてやるべ」
皆、頷いた。

「ありがてえ。これはばあさんにはねえしょだぞ。俺がまだ高校にへえったばっかしの頃のこんだ。俺んちは松本の東の山の麓にあって、俺にゃ智子っちゅうガールフレンドがいた。もう昔んこんだ。俺んちにゃ山があったからそれんりの生活をしてただ。だけんど、智子の家は自分の畑もねえから、おれんちから土地借りてリンゴを栽培して生活してただ。おめえっちも覚えてるだろう、あの早とさむうひでりーい冬の続いた3年間、智子っちは食っていけなくなっちまって、リンゴ作るのやめて、

親父さんが松本に働きに出たんだ。お袋さんも近くの旅館の仲居に雇ってもらって何とか生活してた。だけんど、親父さんの仕送りとお袋さんの稼ぎじゃ、借家賃払って電気代やら水道代なんかを払ったら飯を食うのがやっとだったんだ。おれは智子のこんが好きで、いずれ結婚したいって思ってた。おれっちは幼なじみだったから、何かという理由を付けちゃ一緒に遊んでただ。智子は小柄で、それほど美人じゃねえが、色白でおとなしい娘だった。おれより1つ年上だった。野菊の墓と同じようなもんだべ。俺っちは親父が厳格で、「将来は立派な人間になって、家を継げ」って言ってただ。おれは智子のことが好きで、好きでたまんなかった。智子も俺のことを好いていたに違えねえ。俺は我慢できなくて、とうとう両親に智子のことを話しちまっただ。いずれ結婚させてくれって言っちゃった。それからが悲劇の始まりだ。親父は智子の両親に連絡して、智子を金輪際自分の息子に近付かないようにさせてくれと言った。智子は九州にあるお袋さんの実家に預けられることになっただ。智子をもっと強い女なら、一人で生きる道を選んだだろうが、あいつあ両親の指示に従うようなおとなしい娘だった。智子と別れる前の日、智子は俺に身体を許した。そんで、「わたしははどんなに離れてても、生涯よっちゃんと一緒のつもりで生きるわ」と言った。俺は気も狂わんばかりだった。俺っちは本当に好き合ってた。智子の身体を抱いたこたあそれほど重要なことじゃなかっただ。兎に角離れたくなかった。智子が去ったその日、おれは親父やお袋に楯を突いて家を飛び出しただ。おれはバイトをして稼いだ金で智子の後を追うつもりだった。だがな、一人の高校生に自分だけの力で生きてゆく術はなかっただ。直ぐに家に連れ戻されちまった。金が無かった。金がねえと何もできねえことをしみじみと味わっただ。俺がこれまで何不自由なく生きて来れたんは両親の金回りが良かったからだ。おれと智子は同じ信州に生まれて、一緒に生きてきた。それなのに、俺は何不自由ない生活をし、高校を卒業すれば大学にも行かせてもらえる。智子は十分な食事も摂ることができなくて、高校にさえも進学できなかった。俺と智子の違いはどの家に生まれたかっちゅう違いだけだ。智子は中学の成績も俺と似たり寄ったりだった。

どうしてこんなことになるのか俺には全く分からなかった。この社会が間違っていると思った。智子の預けられた母親の実家の住所は俺には教えてもらえなかった。俺は悶々とした日々を送った。家に連れ戻されて半年ほどして、偶然智子のお母さんに会った。そして、智子が亡くなったと告げられた。俺は頭が狂ってしまうんじゃないかと思うほど混乱して、悲しみにうちひしがれて3日間食事をすることもできなかった。はっきり覚えてねえが、お袋が俺に何とか食事をさせたんだ。その後も俺は生きているから、きっとそうだべ。なあ、野菊の墓みてえだろう。さすがに俺は智子に手紙書くなんて芸当はできんかったし、智子が死んだときのこんはおばさんが何も話してくれんかったから、分からなかった。だから、別れた後、智子が俺のことをどう思っていたのかは分からねえ。だけんど、おれは智子も俺と同じように、ずっと俺んことを思っていたと信じてこん年まで生きてきた。時々、早く死んで智子に会いたいと思う。もうじきだ。あのとき、もしidトークンがあれば、俺と智子に何の違いも生じなかった筈だべ。生まれた場所の違いで、結婚を反対されるなんちゆうこともなかつただろうし。もし、智子がお袋さんの実家に預けられることになっても、俺はいつでも智子の所に会いに行けた筈だ。idトークンの話しを初めて聞いたとき、ばあさんにやすまねえが、俺は智子を思って布団の中で涙を流した。どれだけのもんが救われるか知れねえ・・・俺の話はこれまでだ。みんな悪かったな。酒がまずくなったべ」

飛塚が思い出をかみしめるように話した。灘節が言った。

「おめえも、つれえ思いをしてきたんだな。そんな過去をもってるやつが大勢いるんだべな。あの東日本大震災や阪神大震災、それにこの間の東海大震災で被災した人っちだって、みんなおめえと同じような苦しみを味わってるんだべな。だけんど、自然の災害で受けた悲しみちゆうんは何か時が解決してくれるけど、社会の仕組みから来る苦しきは、あんときどうして何かできなかつたんかって後悔が残るべ。本当は儂らみたいな、旅行できるような奴じゃなくて、もっと苦しんでる人っちにこのidトークンを分けてやった方が良くないじゃねえべか。おれはそ

う思うべ。俺もけえったら人の役に立つことを何かするだ。この世を去るまでにまだ間があるからな」

平蔵が言った。

「なあ、まあずまじめな話になったべ。ここらでひとつ氣勢をあげべ。儂がこのあたりん年寄りの仲居さんに宴会に参加してもらいてえって女将に頼んであるんだ。もうじき9時になるべ、仕事を引けたら、2、3人参加させても良いって言ってただ」

老人達の真剣な顔に微笑みが戻って来た。

少しして、3人の仲居が宴会に加わった。それからは砕けた話で盛り上がった。全員、大分酒が回ってきた。阿形伝蔵がトイレに行くと言って立ち上がった。2、3歩歩いて伝蔵はその場に倒れた。仲居が慌てた。男達もふらふらしながら、這いずるようにして伝蔵の元に集まった。伝蔵は呼吸不全を起こしていた。仲居が救急車を呼びに飛び出して行った。仲居は直ぐに戻って来て、「救急車が出払っていて、直ぐには来れないようだ」と言った。支配人が急遽ホテルの送迎車で町の病院まで連れて行ってくれることになった。比較的酔いの回っていない3人が付き添うことになった。灘節、飛塚、高村の3人だ。

当番医に担ぎ込まれた阿形伝蔵は顔面蒼白で虫の息だった。ホテルの支配人と3人の老人達がおぼつかない足取りで必死になって伝蔵を救急医療室に運び込んだ。

賢が諏訪の調整事務所から電話を受けたのは入浴を済ませて、瞑想を行っているときだった。賢は事務所の係から塩山の救急病院の所在地と現在の伝蔵の様子を確認すると、直ぐに着替えて病院にテレポーテーションした。救急医療室の外にはホテルの支配人と3人の老人達が落ち着かずうろろうろしていた。

「阿形さんの具合はどうですか？」

「あ、社長さん、どうしてここに？」

飛塚が言った。

「調整事務所から聞いたんです。それで、具合はいかがですか？」

「芳しくねえ、脈が弱くなって、呼吸も細くなってるだ。呑んで立ち

上がったとき、急に倒れただ」

高村がそう言うと同時に病室の扉が開いて、院長が姿を現した。

「残念です。力は尽くしたのですが……」

全員病室になだれ込んだ。

「おい、伝蔵、伝蔵、しっかりしろ、まだこれからじゃねえか」

「伝蔵、生きけえれ、生きけえれ」

賢は直ぐに伝蔵の服の襟を開いて、心臓の上に手を載せて瞑目し、伝蔵の意識を追った。伝蔵の意識はまだ肉体を出たり入ったりしていた。

4人の男達は呆然と賢のやることを見守っている。病院の院長と2人の看護師も4人の男達の背後で、賢の為すことを黙って見詰めていた。賢は伝蔵の体内を透視した。銀線はまだ切れていない。大脳辺縁部が麻痺状態になっていて、心拍が停止し、血液の循環が止まっている。細胞達が生存のプロセスを止める処置を開始していた。急性のアルコール中毒のようだった。肝臓の解毒能力を越えたようだ。賢は空中のプラナを自分の身体に注入し、それを掌の労宮を通して伝蔵の脳幹部にある心臓の働きを制御する部位と心臓、さらには肝臓に注入した。賢の身体の中をものすごい勢いでエネルギーが流れてゆく。賢は完全にエネルギーのパイプに成り切った。身体がピクッと僅かに反応した。心臓が鼓動を始めた。初めは微かに、そして次第に力強く伝蔵の心臓は動き始めた。伝蔵の口元が微かに動いた。賢は瞑目を解くと言った。

「看護師さん、直ぐにぬるま湯を持って来てください。白湯を飲ませて血中のアルコール濃度を下げなくてはなりません」

背後から医師が言った。

「だめだ、前田君、直ぐに輸液の点滴だ」

「はい、分かりました」

看護師が直ぐに点滴の準備をした。伝蔵は点滴が始まると少しして、意識が戻った。それから医師は看護師に尿尿瓶を用意させ、伝蔵に排尿をさせた。伝蔵は目を開け、ふっと息を吐いた。

「す、すまねえ、みんな、すまねえ」

「生きけえったのけえ？……おお、良かった、伝蔵、良かった、伝蔵」

飛塚が言った。

「よかった、よかったべ」

看護師が白湯の入った吸い口を持ってきた。医師が看護師に「肺に入らないように吞ませなさい」と注意をした。看護師の差し出した吸い口をくわえて、伝蔵は白湯を一飲みした。

少しして、平蔵達がどやどやと入って来た。辺りに酒のにおいが漂う。

医師が言った。

「歳を取ったら、酒も度を越しちゃいけませんね。今回は奇跡的に命を取り留めましたが、いつもこんな風にうまく行くとはいりません」

老人達は下を向いている。

「ところで、あなたはどなたですか？どこかの病院の……？」

医師は賢に向かって尋ねた。

「いいえ、ただ、私には人の体内の様子が感受できるのです。阿形さんの脳幹が麻痺して、心肺停止になっているように見えました。まだ生命の銀線は繋がっていらしたので……体内のエネルギー循環を加速させてみたのです」

「うーむ……だけど、今回はうまくいきましたが、何時もこんなことができると思っていると失敗しますからね。今後は注意してくださいね」

「はい、出過ぎたことをして、申し訳ありませんでした。先生のおかげで阿形さんは一命を取り留めました」

何も知らない平蔵が言った。

「先生、ありがとうございます。おれっち、伝蔵のかみさん、お薦さんになんて言って良いか分かりません。ありがとうございます」

「今後はあまり、吞みすぎないことです。阿形さんばかりじゃありませんよ。皆さんも、ここで白湯を飲んで、小水を出して行ってください」
一行は伝蔵を病院に置いて宿に戻ることにした。賢が徹夜で伝蔵を看病した。個室に移された伝蔵は2人きりになると賢に言った。

「社長さん、儂にゃ、社長さんが儂を助けてくれてるのが分かってました。ただ。社長さんの温かい手が儂の心臓を擦ってくれてて、パーになった

儂の頭に目を覚ます様に、何度も何度も電気ショックを送ってくれてるのが見えました。俺の頭の所で火花が飛んでました。社長さん、本当にありがとうございました」

「阿形さん、幽体離脱して、観ていたんですね。あなたにエネルギーを注入することに夢中で、うっかり気付きませんでした」

「なんですか？その幽体何とかちゅうのは？」

「いいえ、何でもありません。朝まで静かに休んでください。僕が側に居てあげますから、心配なさらずに」

「社長さん、済みません。ありがとうございました」

伝蔵の差し出した右手を、賢は両掌で挟むように握った。

翌朝、賢は病院から治療代の伝票を受け取ると、タクシーで伝蔵を宿まで送り届け、テレポーションで由仁に戻った。

旅行から帰った8人は旅での出来事と自分達感じたi dトークンの有り難みを尾ひれを付けて家族や近所の者達に喋って歩いた。末宮の人々はその話を聞いて、このプロジェクトを進めている社長が失踪事件の解決や東海地震での人命救助などで有名な内観賢であることを知った。住民達の中には驚き、涙を流した者さえいた。そんなわけで、末宮地区住民のi dトークンへの信頼度は高まり、小さなトラブルはあるものの、試行運用は全体的には順調に推移していった。1ヶ月ほどして末宮地区唯一のミニスーパーに異常事態が発生した。食料調達先の内、米、パン、餅、パスタ、饅頭などの主食の調達が難しくなってきた。卸店の多くが品薄という理由で、ミニスーパーに対して販売総量の制限を設けた。さらに1週間もすると、生鮮食料品の調達も難しくなってきた。それから数日後、今度は末宮だけでなく中郷町にある食料を扱うどの店舗も揃って食品の品薄状態が起きてきた。それは直接住民の生活にも影響を与え出した。初めのうちは蕎麦を食べたり、買い置きの食料で生活していたが、誰もが、どうもおかしいと感じ始めた。それは調整事務所に働く事務員達も同じだった。事務員の2人が県内他市町と山梨県、静岡県、富山県の何軒かのスーパーの様子を見に出掛けたが、いずれも仕入れに異常はなかった。調整事務所は食料品の卸を行っている会社を次々に訪問

し、真相を問い糾した。卸の会社は食料の入荷があると直ぐに通常取引価格の1.3倍の価格で買い取りに来る量販店があるので、そちらに回しているとのことだった。しかし、良心的な卸もあり、それらの卸は新しい取引先から高値を示されても、既に約束している納入先への納品を優先した。そのおかげで、末宮のミニスーパーやコンビニから食料が完全に消えるようなことは無かった。その事が数馬の耳に入った。数馬は即座に物質転送機を使った配送ルートを確立してしまった。スーパー、コンビニと相談して、販売量に制限を与えた卸業者との取引は全てキャンセルさせ、マトラー・システムが食料品の販売を仲介して、東京や、原産地から直接末宮に配送するルートを構築してしまった。食料調達妨害に失敗すると、妨害組織は別の形で攻撃を仕掛けてきた。末宮地区を走っている車に当て逃げする車が急増した。逃走する車のナンバーは偽装ナンバーでそれが明らかに故意による妨害だということがはっきりした。そして事故処理の段階で、保険会社との交渉に圧力を掛けている組織がある事も判明した。その組織も偽装組織で、保険会社の担当者も「言うことを聞かなければ、家族に対して危害が及ぶ」との脅しに負けて、事後の処理を遅らせたり、免責金額を高くしたりしていた。調整事務所はその影響で処理効率が落ちてきた。しかし、数馬も賢も、全然気にしなかった。当初から多少の妨害があることは覚悟していた。いろいろな妨害が功を奏しないと分かると、妨害組織は住民の不動産や預貯金などの財産を狙うようになった。i dトークンの運用で、住民達の不動産に対する執着心が薄れてきたところを狙い撃ちしているようだった。手口は非常に巧妙で、「i dトークン運用の期間、資産がなくならないように代理で管理してやる」と話を持ち掛けて、数十ページに及ぶ条項の中に無償譲渡の条項が含まれている厚い契約書にサインさせるというもの。振り込め詐欺的なもの、リゾートホテルの販売に似せた詐欺など、様々な手口の詐欺が中郷町全域に出現した。中郷町役場と調整事務所は県警と連携して、詐欺グループの摘発に躍起になった。その成果もあり、中郷町に於ける詐欺事件は激減した。警察の取り締まりの強化に伴い、町民も外部からの電話や不意の訪問販売などに騙されなくなったのだっ

た。一連の妨害工作が無駄だということが分かると、妨害組織はなりを潜めてしまった。それからは住民達も不安を覚えることがなくなった。その頃から、住民の間の互助組織の活動が活発になってきた。乳幼児から小中学生の養育支援、施設の拡充、比較的業務内容が厳しい労働を強いられている者への労働支援、高齢者の行動支援、介護支援など、様々な分野の支援活動組織ができてきた。看護・医療や精神的な支援も盛んに行われるようになってきた。調整事務所は常に収支の推移を追跡していた。当初は支出のみだったが、1ヶ月後は支出の3パーセントの収入があり、2ヶ月後は収入が7パーセントにまでなった。収入の殆どは蕎麦とその他の農産物だった。最初の内、「いくら努力しても、一銭の金も入ってきやしない」と、半ばふてくされ気味だった農家や蕎麦業者からも不平・不満の声は聞こえなくなった。3ヶ月目に入ると、テレビ局が取材に来るようになった。政府関係者もしばしば調査に訪れた。しかし、どの訪問者も住民が他の県の住民と何ら変わらない生活をしていることに、出鼻をくじかれた思いで帰って行った。ひとつの大きな動きがあった。試行トライアルの将来のあり方を独自に検討していた中郷町の中のある青年グループが、トライアルとして末宮に次世代半導体を用いた無音室作成モジュールを製造、販売したいと言ってマトラー・システムに提案を持って来たのだ。報告を受けた数馬はその製品の着想もさることながら、末宮で創業したいという青年達の熱い想いに感動を覚えた。数馬は早速青年達を東京の事務所に呼んだ。青年達は日本の将来に殆ど絶望的なイメージを抱いていた。彼らは現在の日本の問題を解決できるかも知れないi dトークンシステムの可能性に賭けてみたいと数馬に訴えた。数馬は彼らを会議室に通し、3時間に渡る説明を聞いた。彼らの説明は2部に分かれていて、先ず製品そのものの説明、続いて事業計画の説明が行われた。製品は近隣の騒音に悩まされている家を想定し、室内の数カ所に直径10センチメートルほどの丸い装置を取り付け、外部から入ってくる騒音をその装置で傍受し、スピーカーから出す音でキャンセルするというもので、装置同士が常に通信し、室内の各場所の騒音値を算出すると同時に、各場所に取り付けたスピーカーからその位置に

対してノイズキャンセリングの為の逆位相の合成音の音波を発生させるというものだった。これはノイズキャンセリングヘッドホンの技術と空間の音場観測技術を結集し、集積化した高速ワンチップマイコンで処理を行うもので、非常に高い技術の要求されるものだった。数馬は諏訪の青年技術者の技術力に今更ながら驚かされた。青年達はまだ形状が定まっていない、やや大きめのサンプル装置を会議室の6カ所に設置してデモを行った。ビルの中の会議室では、もとより外部からの騒音は聞こえない。しかし、彼らは騒音源のモードを室内発生騒音モードに切り替えることが出来ると言った。それは不思議な体験だった。デモ担当者がスイッチをオンすると、メンバーの会話が殆ど聞き取れなくなった。数馬が試しにボールペンをテーブルの上に落としてみた。全く無音だった。数馬は、たとえ末宮地区に工場を建てられなかったとしても、彼らにこの製品を販売にまで漕ぎ着けるようにさせてあげたいと思った。

数馬は賢と相談して、直ぐにマトラー・キャピトルという投資会社を設立した。初仕事として、諏訪の青年グループに投資することになった。彼らは直ぐに国内法に基づいて会社を設立した。会社の名称は諏訪消音株式会社とした。そして、株式は100パーセント調整事務所が投資する形を取った。会社の設立から2ヶ月で工場の建屋が完成した。工場の建設には様々な問題も生じた。建築設計事務所と建築会社が茅野市の会社であったため、i d トークンという形態での仕事を引き受けさせるわけにはいかなかった。建築会社と協議の上、従業員には末宮にいる間だけ i d トークンを所有してもらうことで運用することになった。建築会社の従業員は i d トークンをあたかも財布携帯の感覚で使用していた。会社が稼働し始めたのは3ヶ月後だった。どうしてそんなに早期に起業できたのか皆不思議に思ったが、彼らは既にその下地を持っていて、マトラー・システムに提案に来たときには回路設計、VLSI（大規模集積回路）の型設計、ケースのデザイン設計と型設計などの設計業務は完了していたし、部品調達箇所の選定などもほぼ決めてあったのだ。賢と数馬は面白いことになったと思って成り行きを見守っていた。マトラー・システムの宣伝広告の効果もあり、諏訪消音の売り上げは見事な立

ち上がりを見せた。販売製品はノイズ・エリミネーター・ゼットという名称で、NEZ言う略称から、「寝ずに音の番をする」という意味付けをして、“ネズ”という愛称で呼ばれるようになった。ネズの売上げの貢献があって、末宮での試行開始から半年後には調整事務所の収支は収入の比率が40パーセントになるまでに至った。勿論収入のアップに貢献したのは諏訪消音だけではなかった。この地域の試行を見学するためにはるばる海外からも多くの人々が訪れるようになったため、急遽ホテルも建設されたし、レストラン、饅頭・蕎麦店、旅行代理店事務所などが建設されていった。商売の繁盛で利益を得たいと考えている者も少なくなかったが、idトークン運用の壁は厚く、どうしても個人的な儲けを狙った投資をすることはできなかった。しかし、殆どの住民は十分満足していて、国内旅行に出掛ける者も増えてきた。その度に調整事務所は旅行者の安全に特別の配慮をしていた。賢と原、数馬、梓の4人は協議して、試行サイトの拡大に踏み切ることにした。末宮という狭い限られた地域では、悪意のあるものは排除することでなんとかあった。浮浪者などが、何とかこの地域に移り住んでidトークンを手に入れようとするのも防ぐことができた。様々な欲望を持った者達の侵入も防いできた。これからは地域がその数倍に広がる。それはどこまで善悪を越えて運用できるかというひとつの賭であった。4人は決断を下し、プロジェクトのメンバー、調整事務所の責任者を加えて検討会を開催した。殆どの出席者がさまざまな懸念材料を持ち寄っていた。それは4人にとってはありがたいことでもあった。一つ目の懸念は、実際にサイト内で窃盗、強盗傷害、殺人などの犯罪行為が行われた場合の対応方法、2つ目は児童の教育をどうするかということ、3番目は婚姻、出生、死亡などの届け出と、国の支援の受け方などで、そのほか様々な問題点も提起された。それらはいずれも事前に想定している範囲内のことで、調整事務所は末宮の試行を通じて、既に解決策を見いだしていた。唯、一つ目の懸念である実際の犯罪に対する対処については、末宮の試行では部外組織による犯罪以外にそのような事例がなかったため、いくつかの想定例を用意してその解決策をマニュアル化することになった。あくまで中郷

町内での司法の適用は無くすことにした。その事は、もしこの地域で傷害事件などを起こした場合は、この町を追われることになることを意味した。この問題を提起していたプロジェクト・リーダーの葛川が、

「本来、諏訪プロジェクトでは罪を犯してしまったものに対しても、この組織内で更正支援を行うことになっていたと思いますが？」

と苛立ちを露わにした。それに応えて賢が言った。

「確かに葛川君の言うとおりが、諏訪が日本国内にある限り、国内法に基づいて処理せざるを得ない。だから、この地域から外に出てもらえない」

「それじゃあ、この諏訪プロジェクトは単なるテーマパークに終わってしまうと思います。一番難しい問題にも取り組むべきではないでしょうか？」

「何か良いアイデアはあるのか？」

葛川の積極的な姿勢に全員耳を立てた。

「はい、万全な解決策ではないと思いますが、児童については、保護観察を適用してもらうように働きかけ、そのように裁定が行われたら、この施設内で保護することにします。成人男女については、執行猶予期間はこの地域内で生活させ、拘留されている期間と実刑判決で実際に投獄される場合とだけ国内法の処置に従い、拘留期間の満了および出獄時には、サイトの調整事務所が引受人となって、責任を持って保護するようにしたらどうかと思うのですが・・・」

梓が言った。

「私たち、内観社長も樋口社長も原研究所長もみな、あなたのおっしゃるとおりに考えていましたよ。この地域から出てもらおうと謂うのは、実刑判決を受けたときと、法的処理で拘留を受けるときだけのことです。処置はそれで何とかありますが、問題は犯罪者の更生なんです。理想的である筈の環境を与えたのに、罪を犯してしまうということは、その人の持って生まれた特性である可能性がありますから、それをどのように修正させるのか、また、我々がカルマの解消に直接手を貸して良いものかどうか、そういったことに両社長と原所長は頭を悩ませているので

すよ。それともう一点、自動車事故や失火の延焼などによる不可抗力の加害で有罪判決を受けた場合です。その場合は心のケアをどうするかが大きな課題になります。御三方は心のケアのための施設を建設してはどうかと考えていらっしゃいます」

葛川は自分の浅い考えを恥じて参加者に謝罪した。賢が言った。

「葛川君、そんなに謝らなくても良いですよ。君のような考えができる人が居るといことは我々にとって、最も勇気付けられることです。さすがにプロジェクト・リーダーだと思います」

数馬も原も頷いた。葛川は恐縮してしまった。その後も様々な議論が行われたが、結局全員一致で試行サイトを中郷地区全域にまで拡張する案件が可決された。

試行の拡張はそれほどスムーズには進まなかった。先行して、住民への説明と反対者の説得が試みられていたのだが、この地域には一攫千金を夢見ているものもかなり住んでいたし、現状の生活を謳歌している者も少なくなかった。特にこの地域に別荘を持っていて、普段関東地区や関西地区に住んでいる季節住民には話しが通じなかった。その一方で i d トークンを心待ちにしている者も少なくなかった。特に年長者の中には、全てを断捨離して生活を調整事務所に全託し、無欲にして無窮の余生を生きることを喜びと感じている者達もいた。中郷地区の地域住民に対する説得を取り上げたテレビ番組が A B C テレビで放映されることになった。「釈伏の行脚」という嫌みの籠もったタイトルのドキュメンタリー番組だった。あまりに強い抵抗を示す住民に対しては、調整事務所の係員の対応も多少横柄になり、どういうわけかそんな場面ばかりが取り上げられて、「行きすぎた説得行為」などという説明がされた。しかし、殆どの反対者は金銭的な交渉で和解することができた。反対だった者達の大半は、時価の倍近くの金額で不動産を調整事務所に明け渡し、中郷地区を出て行った。彼らにとって最後まで中郷地区に居座る意味も無いようだった。一番困難を極めたのは、先祖代々の土地を守り抜いてきた高齢の資産家だった。2軒の家が最後まで説得に応じずに残った。諏訪プロジェクトは2軒をそのままにして、試行を開始することに決定した。

それはいずれ周囲の環境が i d トークンなしには生活できないことに気付き、心変わりするだろうとの観測からだった。しかし、ことはそう簡単に収まらなかった。2 軒が調整事務所と内観システムズ、マトラー・システムを相手取って訴訟を起こしたのだ。多忙な中、賢と数馬は何度か松本にある地方裁判所に足を運ばなければならなかった。訴状には「生存権の侵害」と表記されていた。しかし、直ぐに結審することになった。

裁判長は

「i d トークンという手法は、居住者に無償であらゆるサービスを提供するもので、原告は従来通り金銭を用いて中郷地区以外のいかなる地域においても商品の売買、その他あらゆる取引の決済を行うことができ、多少買い物等の不便が生じることはあっても、中郷地区内では何等、違法な生存権の侵害行為を受けることになるとは認められない」

という見解を述べ、告訴は棄却された。2 軒の家は弁護士と相談して上告を断念した。

予定より 2 週間遅れて、漸く試行の運用が開始された。

祐子は、国連事務総長との会談を終えてから、このままコンゴに留まって人々の救済を続けるより一旦キガリに戻り、ウグング・ボンリガンボと頻繁に交信しながら、コンゴの、更にはアフリカ全土の改革に取り組むべきではないかと考えるようになった。まだ亜希子を失った悲しみが身体の中に充満していて、小さな物音にも敏感に反応し、止めどのない涙を流した。今にも背後から「お姉様、一緒に行ってもよろしいですか？」と声を掛けられそうな気がして、歩いていてもつい後ろを振り返ってしまう。ハンカチで涙を拭うママユウコの姿は同行している仲間の悲しみを誘った。会合が済むとヘデン事務総長は随行員と共に直ぐにホテルを発った。祐子は仲間と共に取り敢えずもう一泊し、翌朝出立することに決めた。傷を負った者達の復調がどの程度か確認して、まだ長旅に耐えられないようなら更に 1 泊しようと考えていた。キルリエとプリミテのことが気に掛かったが、再びこのような危険な行程を踏むことは、自分に同行してくれた人たちを再び危ない目に遭わせることになると思

い、ふたりの女性は一旦キガリに戻ってから、賢に頼んで連れて来てもらうことにした。

午後6時に全員がホテルのレストランに集合した。祐子がメドリスナとアルフォンに伴われて階下に降りると、既にジミーとベムがソファーに腰掛けて祐子が来るのを待っていた。

「*****」(ジミー、ベム、具合はどう?)

「*****」(もう大丈夫です、ママ)

ジミーが少し微笑み掛けて言った。

「*****」(ママ、俺はあの時もう死んだと思いました。ママが俺たちを救ってくれたんですね。傷も消えてしまって、本当に不思議です) 祐子は2人が傷を受けた肩と胸に手を触れて微笑んだ。

「*****」(よかったわ)

祐子達がレストランに入ると、席に座っていたマリーとソニアが微笑みながら立ち上がった。テーブルには既にディナーウェアが並べられている。全員が席に着くと最初に祐子がスワヒリ語で話をした。

「*****」(みなさん、おかげさまで国連のヘデン事務総長との会合はうまくいきました。国連も私たちの考えているアフリカ改革の計画を支援してくれることになりました。これも、みなさんのおかげです。当初私たちは、コンゴ国内の貧困に喘いでいる人たちを訪れ、一人でも多くの難民を救済しようという考えでこの国を訪れたのですが、みなさんも知っての通り、この国の政情は決して安定しているとは言えません。この国の中で活動続けることは皆さんの命を危険に晒さなくてはならないことを意味します。私の妹亜希子も命を落としてしまいましたし、ジミーとベムも瀕死の重傷を負いました。私たちを救うために自分の身をも顧みずに勇敢に敵に挑んでくれたからです。他の人たちも、それぞれに立派に戦い、そして負傷した人を看護してくれました。こんなことになって、私は今自分の見通しが甘かったことを痛切に悔やんでいます。皆さんの命を危険に晒してしまい、本当に済まなかったと思います。許してください。幸いジミーとベムは一命を取り留め、このように復帰することができました。これも全て私たちを守ってくださる神様のおかげ

と思っています。今はみんなで亜希子の冥福を祈ってください。事務総長がお帰りになってから、私は考え続けました。この装備だけで更に皆さんを危険に晒してまでコンゴ国内に留まって難民救済活動をするべきなのか、もっと迅速、確実な方法でコンゴを平和な国にするべきではないのかと。いろいろ検討した結果、まだ皆さんにはお知らせしていませんが、これからのコンゴを初めアフリカ中部で共和国制を敷いている各国に、国民の平和を実現することを第1優先で取り組んでもらうことにしました。各国を国全体にまで及ぶ大変革に導く為には、一旦キガリに戻り、これはまだ皆さんには言えませんが、ある特別な手段を用いて取り組むべきだと考えました。ですから、ジミーとベムの身体が移動に耐えられるようになったら、できるだけ早くここを発ってキガリに戻り、国際機関を利用した次の手段に切り替えて、通信手段と物資の配送手段を駆使して、改革を仕掛けてゆこうと考えます。せつかくここまで来て、撤退するかのように感じるかも知れませんが、決して撤退ではありません。更なる前進の為です。みなさん、分かって頂けますか？) 全員が頷いた。マリーが言った。

「*****」(ママ、私もそれが一番いい選択だと思います。ママには他の人に無い神通力がありますが、いつもママが戦闘から私たちを守る為に活動しては、この壮大な改革は思うように進みません。ママと私たちがその目的を達成させるためには、戦う理由のない戦闘に関してはならないと思います)

「*****」(マリー、ありがとう。他の人はどう?)

ジミーが真剣な面持ちで言った。

「*****」(ママ、俺も、ベムももう元の身体に戻っています。今直ぐにでも出発できます)

「*****」(無理をしてはだめよ)

「*****」(いいえ、ママ、この通りです)

ベムも傷を受けた左胸を右手で軽く叩き、左腕に力こぶをつくるポーズをして見せた。

「*****」(ベム、分かったわ。お願いだから、傷口に乱暴しない

でね)

みんな笑った。

「*****」(さあ皆さん、今日はコンゴの最終日、好きなものを注文して良いわよ。遠慮していたら後で後悔するわ)

祐子の言葉で、全員がわいわいと相談を初め、次々にウェイターに注文した。

食事が終わると、祐子は部屋に戻って直ぐにウグング宛てに手紙を書いた。

「*****」

(ウグング・ボンリガンボ様

ヘデン事務総長との会合は成功しました。事務総長には私たちの計画について、具体的な内容は話せませんでした。協力を得るために大筋の説明はしました。事務総長は国連が全面的にバックアップしてくれると約束してくれました。私たちは、早速行動を開始できる段階に至ったと思います。今あなたの考えている手順を教えてください。私は現在ゴマのホテルに居ますが、明日の夕方にはキガリに戻るつもりです。キガリには物質転送機があります。あなたの計画を実行する為には私がキガリに居なくてはまずいと考えました。今晚から、逐次連絡を取り合っ、ことを進めましょう。

それから、あなたにお伝えしておきたいことがあります。大変残念なことです。この間一緒にあなたに会ったアキが戦闘に巻き込まれて落命してしまいました。

ユウコ)

次に祐子はアイリーン宛てに手紙を書いた。

「*****」

(親愛なるアイリーン

みんな元気ですか？いつもスバハの面倒を看てくれてありがとう。あなたが留守を守ってくれると思うと、私は安心して活動することができます。私たちは予定通り、あなたから連絡をもらった空港のすぐ近くのホテル エグゼクティヴ・パレスで、ヘデン事務総長にお会いし、会

合を持つことができました。会議は成功しましたよ。これからの私たちの活動には国連も支援してくれることになりそうです。私たちは今日までこのホテルに滞在して、明日の夕方キガリに戻ります。あなたにもずいぶん苦勞を掛けちゃいましたね。この前の手紙にも書いたとおり、私たちはコンゴの戦闘の中に紛れ込んでしまい、妹のアキが亡くなり、ジミーとベムが負傷してしまいました。ジミーとベムは大分回復しましたが、アキは私たちの手の届かない遠い世界に去ってしまいました。私たちは今悲しみに耐えています。でも、今度の遠征でみんなの望んでいる「アフリカを幸せな世界に変える」為の糸口を見つけることができましたと思っています。キガリに戻ってから詳しいお話をします。今後のことはまた相談しましょう。スバハにはママが明日には戻って来ると言ってあげてくださいね。留守を守ってくれていろいろありがとう。サスカブや他の人たちにもよろしく伝えてね。

ユウコより)

2通の手紙を書き終えて、バックパックを広げ、位置情報端末をまさぐると、手紙が届いていた。祐子は手紙を書く前に確認すれば良かったと思った。

「*****」

(親愛なるママユウコ様

先ず、大事なことからお伝え致します。ウグング・ボンリガンボ様からお手紙が参りました。この手紙に同封してあるのが、そのお手紙です。

皆様、その後、ご無事でしょうか？私は、皆様のご無事であるように毎日神様にお祈りしております。ママのことですからこの遠征できっと素晴らしい成果が得られたことと思っています。国連事務総長がそちらに向かわれるとき「ゴマのホテル・エグゼクティブ・パレスでママユウコと落ち合い、会合をする」とおっしゃっていました。無事ヘデン事務総長にお会いできたのでしょうか？心配しております。何か問題があったら、こちらにご連絡ください。こちらでできることは何でもしたいと思います。こちらは、スバハの風邪も良くなり、とっても元気になりました。私もスバハにおっぱいをあげたり、一緒に遊んだりしているときが

一番幸せです。スバハが寝付くと、スバハの寝顔を見ながらマリゼに教えてもらったアガセケ作りをしています。こんな幸せな時間がやって来るなんてあの過去の混沌とした悲惨な生活が嘘のようです。私たち、サスカブ族長も、フルマの人たちも、みんなママユウコ様の戻ってくるのを楽しみにしています。いつ頃お帰りになれるのでしょうか？またお便り頂けるのを、楽しみにしております。

アイリーンより)

アイリーンの自分に対する言葉が更に丁寧になっているのを祐子は感じた。アイリーンの手紙の封筒の中にもう一通の書簡が入っていた。

「*****」

(ママユウコへ

事務総長との会合が成功したという連絡をもらい、長い間思い、計画し、準備してきたことがやっと実行に移せる段階に至ったと、感動で胸が震えました。私はアフリカ各国に居る同士に直ぐにこのことを連絡しました。皆信じられないと言っています。でも、中には国連の非人道的介入がないかと警戒心を抱いている者達が居ることも確かです。各国元首と中枢メンバーの所在位置の確認は順調に進んでいます。特にコンゴについては、以前から仲間が調べ尽くしてありますから、キンシャサの連中にその情報の信頼度を高め、精度を高める努力をさせています。他の国でもそれぞれ真剣に取り組んでいると報告を受けています。それから、各国元首の個人的な過去の洗い出しも順調に進んでいます。と言うのも、どの国のメンバーも既に元首については十分に認識しているからです。ただ、取り巻きについては不明な部分も多いため、十分な情報が得られない可能性があることも否定できません。各アジトにはDVDライターを設置するように指示しました。それから、威嚇用の各種小型爆弾の準備も着々と進めています。実はこの間お会いしたときには詳しい話しをしましたが、コンゴのキサンガニに秘密の爆弾製造拠点があるのです。キサンガニは引き続いた戦闘で荒廃し、多くの国民がこの地を去り、政府軍や他国籍軍、そのほかの雑軍が近付かなくなったため、干渉から逃れて秘密裏に事を運びやすい場所なのです。そこにはこれまでに

製造してきた各種の小型爆弾があります。これまでは殺傷も辞さないという考えで爆弾を造ってきましたが、ママとの会合の後、手動地对空ミサイル — MANPADの改良型 — を除いて、爆弾のタイプをママの言う、非殺傷型の小型のものに変えています。勿論地雷は一切造っていませんし、クラスター型の爆弾も造っていません。現在所有する爆弾の数は1000発ほどですが、新しい小型爆弾はまだ120発ほどしかできていません。しかし、常に作り続けますから、現段階で計画をスタートさせることも可能です。ただ、衛星ラジオの準備がまだ整っていないので、実行時期をこれからママと取り決めてゆきたいと思っています。衛星ラジオについては、あまり知識がないので、是非物質転送機を発明したママの仲間のお智恵をお借りしたいと思っています。いつキガリに戻るのですか？キガリには物質転送機があるので、ママがキガリに居てくれると、事がスムーズに運ぶと思うのです。では返信をお待ちしております。

ウグング・ボンリガンボ)

祐子はできるだけ早くキガリに戻ろうと思った。既を書いてしまった手紙を取り出し、アイリーン宛ての手紙はそのままよしとし、ウグング宛てには追伸を書くことにした。

「*****」

(追伸：ウグング様、あなたの手紙を拝見する前に、あなた宛てに手紙を書き忘れてしまいましたので、これは補足です。あなたの迅速な行動に敬意を表します。小型爆弾については驚きました。そこまで準備が整っているとは思いませんでした。私の方は国連事務総長との会談を除いて、それほど急激な進展はありません。VLSIチップの開発進捗状況については早急にMr.ウチミに確認します。衛星ラジオと静止衛星確保の件は私がキガリに戻ってからもう少し詳細を詰めましょう。

ユウコ)

一行は翌朝早くホテルを出た。国境は直ぐ目の前だった。祐子達の車が先行した。祐子は運転しているメドリスナに言った。

「メドリスナ、どこかお土産を買えるところに寄って」

「ママ、俺には分かりません。街の中に戻ってみますか？」

「そうね、一寸待ってね」

祐子はトランシーバーでマリーに相談した。やはりマリーはよく知っていた。国境付近に行けば土産物売っている露店商があると言った。一行は兎に角、国境付近まで行ってみることにした。国境付近は家々の密集した地域で、あちこちに武装した兵士の姿が目立つ。祐子はホテルの支配人が一行を見送りながら「国境付近には盗賊や、反政府軍などはあまり近付かないので比較的安全です」と言っていたのを思い出した。まだ8時前なのに、外は既に大勢の人でごった返していた。国境のゲートが300メートルほど先に見えた。ゲートに通じる道の両側では、人々が持ち寄った品物を広げて店を開く準備をしている。既に商売を始めている露天商もあった。メドリスナとアルフォンは露店の無い整地されていない石だらけの路肩に車を停めた。祐子とマリーが直ぐに車から降りた。ジミーとベムが袋に入れた小銃を手にして急いで後を追った。丁度アクセサリーの露店の準備ができたところだった。祐子は陳列してある宝石類を覗き込んだ。

「*****」(この辺りの特産は何かしら?)

露店商の女性が応えた。

「*****」(マラカイトとエメラルドがとれるよ)

祐子は思い当たる女性達全員にマラカイトやエメラルドの指輪とネックレス、ブレスレットを買うことにして、それぞれ20個ずつ注文した。マリーが横から顔を出し、露店の女性に値段を安くするように掛け合った。女性はマリーの交渉に頷いて見せた。女性はどう見ても余裕のある生活をしているようには見えない。祐子が女性に聞いた。

「*****」(この店はあなたの店なの?)

「*****」(とんでもない、私は唯の店番です)

「*****」(あなた、この仕事の稼ぎは十分あるの?)